
野菜と黄金体験と天気予報

スタンド農法

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野菜と黄金体験と天気予報

【Nコード】

N2487R

【作者名】

スタンド農法

【あらすじ】

【今回のあらすじ】時は流れ。ナギとアリカの息子が先生になると言う。そのことを聞き、学園都市・麻帆良に彼が現れた。

【今回の主人公の一言】「忙しいぜ…。これからもっと忙しくなるんだろうな…。ネギが変なこと起こさなきゃあいんだが」

【注意】この作品の「GE」および「GER」の能力解釈は『炉心』さんのサイト『無限時空力炉』にある『究極スタンド大全』に基づいています。

死後の人（？）助け

俺は死んだ。

無様に、風邪をこじらせた肺炎で。

何も為せずに死ぬ自分を嘲笑^{わら}って死んだ。
その筈だった。

しかし、今俺はここにいる。

なぜか大泣きしている男女がいる、真っ白な空間に。

「要するに、あんたがやった失敗を隠すために俺に別の世界へ逃げてくれ、と？」

二人曰く、自分たちは天使。

女のほうで俺の魂をここ（正式名称なし）に連れて来てしまった。だが本当はここに魂を連れてくることは禁止されている。

おまけに俺の魂がこの場の気を纏ってしまっただけで俺が死んだらばれる。

だからほかの世界に行ってくれ、ということらしい。

正直言つて、そんなのありか？、と思う。

まあ、助けてくれたのは例を言うが…。

「そうでなければ妹が投獄されるのだ、頼む！」

「うっ…ごめんなさい。本当にあなたの人生が可哀想で…」

やかましい。

どうせ結婚もしてないし彼女もいなかったよ、畜生。

「我が妹は優しいからな…」

言ってることは随分と失礼だな。

「で、このまま俺はどっかに飛ばされるのか？」

「いや、容姿の変更、能力の付加、肉体の強化、物資の支給がある」

「あ、そうなのか？…じゃあさっさとやってしまおう」

「容姿は？」

「ジョルノ・ジョバァーナ」

「ほう！ ジョルノか！ 私もあれは好きなキャラクターでな！
それで…」

「うるさい黙れ次に行け」

「能力はどうする？」

「ゴールド・エクスペリエンス・リポート」

「黄金体験と天気予報」

「…何がやりたいんだ？お前はこの力で」
「秘密だ」

「肉体はどれくらい強くしますー？」

「ジョジョ並の死にくさで」

「気とか魔力とかスタンドパワーとかは？」

「DIO並に」

「欲しい物がありますか？」

「特になし」

「と言うと思って既に私たちで準備してました！　じゃーん！」

「これは…ウエザーの帽子？」

「はい、でもただの帽子じゃありませんよ」

「これを被れば容姿はウエザー、癖もウエザー、話し方もウエザーになるのだ！」

「…なんつーくだらねーアイテム…まあ一応貰っておこう…」

「さて、終わったな」

「ああ」

「もう行くのか」

「ああ」

「気をつけてくださいね？」

「もちろん。あつという間に死んだら俺の魂の気は消えないんだろ？」

一度死んだ俺。

その俺がこうしてもう一度生を得ようとしている。

「ところで、これから俺が行く世界ってのはどんなところだ？」

「「あ」「

…おい？まさか…」

「い、いやだなーわすれてなんかいませんよー（棒）」

「うむ、全然決めてなかったとかそういうのはないぞ！（余所見）」

「…とつと決めてくれ」

「じゃ、じゃあこれの中から選んでください！」

「これ」

ろくに見もせず指差す。

「『魔法先生ネギま（に限りなく近い）世界』ですね」

「『ネギま』？ …たしか野菜が女子とキスして魔法を使う話だったか？ぜんぜん知らんが」

「字面だけは合ってるな…」

それが正しいのかどうかは知らない。

いや、多分間違っているんだろう。

だが俺は、俺の信じる道を行くだけだ。
願わくば、その道をこれからも貫いていきたい。

「じゃあ、行ってくる」

「あ…名前」

「いや、いい。お互い知らないほうがいいだろ」

「…ありがとう、人間」

「どういたしまして、天使」

そうして俺は、新たな生へと踏み出した。

死後の人（？）助け（後書き）

↓次回予告↓

彼は新たな世界に降り立った。

彼がそこで出会ったのは・・・。

次回、「魔法世界のジヨジヨ」

「あなた…『覚悟して来てる人』…ですよね」

第一話 『魔法世界のジヨジヨ』

気がつくと、ぼくは森に立っていた。

…ぼく？

「く、口調が変わっているッ！？」

まさか、肉体に精神が引きずられているのかッ！？

その時、上から紙が降ってきた。

ひらひら舞うそれを掴み取る。

『容姿に応じて口調が変わってしまうのは不可抗力ですごめんなさい』

そんなことが書かれていた。

「……まあ、いいか…」

今更口調程度で騒ぐことでもない。

さらに紙にはこんなことも書いてあった。

『私たちがあなたを送ったのは、あなたの居た時代から20年ほど前の【魔法世界】です』

『【魔法世界】とは、世界の名を冠してはいますが、実態は地球とは異なる次元に隔離された空間』

『そこは魔法が当たり前の世界。その世界では異質なスタンドも隠

す事が容易になるでしょう」

『ちなみにあなたの肉体は不老で、15〜20歳の範囲で見た目調整可能です。が、不死ではありません』

『肉体年齢の調整方法は、気合or念orスタンドのパワーを全開だッ、です』

『あと、ウェザーの帽子は念じることで呼び出したり消したりすることが可能です』

『ついでに帽子の中は倉庫になっています』

『最後に、最低でも50年は生きてください。お願いします』

じっくりと内容を噛み締めた後、紙を破り捨てる。

中身は半分意味不明だが、それは後になれば分かることだろう。

彼らのサポートは、多分次『何か』を送ってくる時で最後。

ぼくはここで彼らのため、何より自分のために自力で生き抜くことを改めて誓った。

森を数分歩くと、割と広い空間に出た。
広場と呼んでも差し支えないほどだ。

「さて、まずは食糧を確保しないとな」

ここがどこにしても、まず食糧が必要だ。
そのために、初めて自分に与えられた能力を発現する。
使い方は、既に解っている。
頭ではなく体が知っているッ！

「『ゴールド・エクスペリエンス
黄金体験』ッ！！」

ぼくのそばに金色に輝く人影が現れる。
といつてもぼく以外には見えないだろうがな…。
そしてぼくはスタンドの手を地面に添えた。

「産まれろ…生命よ…産まれろ、新しい命よ…！」

土の中で命が産まれる。

ゴールド・エクスペリエンスが産むのは木の根！

「この広場の地面中に広がれッ！」

瞬く間に木の根は成長し、地面を隆起させる。
だがそこで終わりじゃあない。

ゴールド・エクスペリエンスはまだエネルギーを注ぎ続けている。
やがて、木の根は成長し終え枯れていった。

「これでこのあたりの地面は耕し終えたかな」

次に適当な野菜を産んでいく。

と言ってもはつきりとイメージしないと変なものが出来上がりかねない。

しつかりとイメージしながら、ぼくは野菜を産み出していった。

生み出した後はウエザー・リポートも使いながら育てていった。

火はウエザー・リポートが木を空気摩擦で発火させることで手に入る。

水はゴールド・エクスペリエンスが地下深くまで植物の根を伸ばし、水脈を掘り当てる。

人一人が生活するには十分な環境が出来上がっていった。

それから数日後、日課となった畑仕事。

「さてと、今日も畑を耕すことからはじめようかな」

その途中で、ぼくは大変なものを見つけてしまった。

「ん、何だ？木の根が避けて這わない場所がある…」

彼ら gaveくれた最後の贈り物。

「石でも埋まっているのか、それとも別の何かか…」

【それ】は…

「こ、これはッ！馬鹿な、何故これがここにッ！？」

ぼくは【それ】を帽子の中に封印することに決めた。

一週間が過ぎた。

あたりがどうなっているのか分からないのでぼくはずっとここに留まっている。

その間、野菜や穀物はよく育ち、毎日の糧となってくれている。つくづくこの能力を選んで正解だったと思う。

後は肉だが…。

ゴールド・エクスペリエンスの能力を使えば、牛は大きすぎて無理だとしても鶏ぐらいなら生み出せる。

肉も一応手に入ることだし、もういつそのことここに家でも建てようかとぼくは思っていた。

半年ぐらいここに留まってそれから旅立つのもいいだろう、と。

だがこのときのぼくは忘れていた。

『スタンド使いは引かれ合う』

つまり、

『スタンド使いは【戦いの運命——戦闘潮流——】から逃れられない』

と言うことを。

それから更に数日後。

ぼくは異様な音で目を覚ました。

遠くから響いてくる振動、そして轟音。

「新手のスタンド使いか!？」

…いや、勝手に口をついて出ただけで本当にそう思ったわけじゃない。

けれども…

「こっちに近づいてきている…」

かなり離れていたときでさえ轟音が空気を揺らしていた。
今はもう大地がはつきりと揺れている。

「…来る！」

そして次の瞬間。

雷がぼくの畑を吹き飛ばした。

「な……………！？」

まさかの事態に咄然としていると、遠くから何人かが近づいてくる

気配がした。

「おいナギ！ だから練習で魔法を辺りにぶっ放すのはやめろと言っただろうが！」

「うるせ、別に人死には出てないんだからいいじゃねーか」

「そのあなた。大丈夫ですか？」

「……」

そんなことを言いながら近づいてきたのが… 4人。

怒鳴られているのが赤毛でローブの少年。

怒鳴っているのは黒髪メガネの剣士。

声をかけてきたのが黒髪ローブの優男。

最後に無言で降りてきたのが白髪の少年だ。

「…おいお前、大丈夫か？」

黙り込んでいるぼくを訝しげに覗きこむ赤毛だが、ぼくは彼のほうを見ずに言った。

「……これは、あんたが？」

「あ？ ああ、ちよつと魔法の練習しててな」

あっけらかんと言っ彼。

ぼくはキレた。

「無駄ア！」

「ぶっ！？」

彼の顔にゴールド・エクスペリエンスの拳をぶち込む。

「いってーな。いきなり何しやる！」

「『何しやがる』……だって？人の畑を吹き飛ばしておいてよく言う」

平然と立ち上がる少年。

本気で殴ったんだがな……。

だがそんなものは関係ない。

立ち上がったのならば……

[illegible]

「ぼくは今からあんたをブツ飛ばす」

「何だと？」

その言葉を無視し、ゆっくりと少年のほうを向く。

自分の中でスタンドパワーが膨れ上がっていくのを感じる。

「あなた…『覚悟して来てる人』…ですよ。」

魔法で辺りを『ブツ壊す』ってことは逆に『ブツ壊される』かも知れないという危険を

常に「覚悟してしている人」ってわけですよね……」

「ん？何だ？やるのか？」

「お、おいあんた。やめといたほうがいいぞ。こいつは存在そのものがバグ…」

「ごちゃごちゃと煩いな。」

「2度同じ事を言わせないでくださいよ…」

1度でいい事を2度言わなけりやあいけないってのは…
そいつが頭が悪いって事だからです。

あんたをブツ飛ばすと言ってるんですよ…

3度目は言わせないでくださいよ」

「へっ！面白え！やってみやがれ！」

こうして戦いの火蓋が切って落とされた。

ヨウイス・テンベスター・フルグリエンス
「『雷の暴風』！」

大気を切り裂いて飛ぶ稲妻を躲す。

驚くほどに体が軽い。

この一週間では気づかなかったが、常人を遥かに超えた身体能力を
ぼくは持っているらしい。

まさか身体能力までDIO並になってるんじゃないだろうな…。

次々と飛んでくる小さな魔法をゴールド・エクスペリエンスが弾く。

「ハッ！さつきから何使ってた、お前！俺の魔法を弾くなんてやるじゃねーか！」

「教えるわけないだろう」

さつき分かったことだが、こいつらにはスタンドが見えない。

『スタンドが見えるのはスタンド使いだけ』

そのルールはこの世界でも健在らしい。

「ウエザー・リポート！」

空気を操作して真空を生み出す。

俗に言う鎌鼬カマイタチというやつを空に浮かんでいる少年に向かって飛ばす。が、見えているかのように彼はそれを躲す。見えているというより感じているのだろう。

「お前の攻撃は俺には当たらないみたいだな。 どうする？」

「それはあんたも同じだろう。 それに…」

「それに？」

「次にぼくの攻撃が当たった時点であんたの負けだ」

「それは、どうかな！？」

少年の魔力（だと思う）が収束し始める。

ヘカトンタキス・カイキーリアリス・アストラフサト
「百重千重と重なりて走れよ稲妻！」

彼が腕を振りかざす。

キラアキブル・アストラペー
「『千の雷』！」

辺りに稲妻が降り注いだ。

逃げ場のないような全方位からの雷撃。

だがさっきまでの魔法の連射の時に既に対策は練っている！

「ウエザー・リポート！」

雷とは空気の電位差によって生じるものッ！

ならば、等しい電気を帯びた空気を周囲に生み出せば雷は当たらないッ！

更に、落雷の衝撃で舞う塵に紛れて少年に近づく。

足の下に空気のクッションを生み出し、トランポリンのように使って飛ぶ。

食らえッ！

「ゴールド・エクスペリエンスッ！」

「な、てめっ！いつの間くはッ！」

下から飛び上がった勢いそのままにアッパーを食らわす。

そのまま少年は放物線を描いて落ちていった。

S i d e 赤毛

痛え。

まさか殴られるとは思わなかったぜ。

やるじゃねえか、あいつ。

だがまだ俺は戦える。

あいつの攻撃は大したダメージはないみたいだな。
受身を取り、まだ宙に浮いているあいつに向かって仕返しに殴りか
かろうと軽く起き上がった。
つもりだった。

ドンッ！

俺の体は、あっという間にあいつの目の前に飛んでいた。

「な、これは…！？力が湧き上がってくる…！！」

体が軽い。

まるで重さがなくなったみたいだ。

もしかしてあいつの攻撃を食らったからこうなったのか？
だとしたらマヌケだぜッ！

相手にパワーを与える能力だなんてな！

「食らいな！」

全力であいつに殴りかかる。

だが。

思いつきりぶん殴ったはずのその手は、

ゴアッ！

「えっ？」

あいつをすり抜けて空を切った。

「これがゴールド・エクスペリエンスの能力」

あいつが言う。

その目は俺の後ろを見ていた。
振り返って視線を追う。

「お、俺がいるぞ!？」

そこには、俺がいた。

「あんたに過剰に『生命』を与えた。あんたは今、意識だけが暴走している」

ゆっくりと俺の体のほうへとあいつが歩いていく。

「暴走した精神に肉体はついていけない。だからあんたはぼくの攻撃を避ける事ができない」

逃げようと意識しても俺の体はゆっくりとしか動いてくれない。

「つまり、あんたの負けだ」

そうしている内にあいつの見えない攻撃が俺の顔に叩き込まれた。
ゆっくりと何かが顔にめり込んでいく。

「うつ! い! 痛い! 鋭い痛みがゆっくりやってくるッ!」

殴られた瞬間だけのはずの激痛が何十倍の時間にも拡大されて俺を襲う。

「うぐあああああああ！」

そのまま俺は殴り飛ばされて気を失った。

Side Out

攻撃を食らい、彼は吹き飛んでそのまま木にぶつかって崩れ落ちた。
しまった。

殴り飛ばしてから思うのもあれだが、やりすぎたかもしれない。
少しだけ彼に罪悪感を覚えていると、彼の仲間が近づいてきた。

「…あんた…何者だ？」

「ナギの奴に勝つとは大した奴じゃのう」

「僕が何者か…か」

そうだな。

ぼくはもう『俺』じゃあない。

だから僕はこう名乗る。

「ジョルノ。 ジョルノ・ジョバァーナです」

「ジョルノか。 ナギが何かしたようですまない」

「彼の無茶はいつものことですが、いったい何をしたのですか？」

何をしたってそりゃあ。

「彼の魔法がぼくの畑を吹き飛ばしたんですよ」

「それはまた…お気の毒に」

「ええ。丹精込めて育てた野菜たちが一瞬で灰になりましたよ」

こんなことならカウンター能力を持った植物も植えておくんだった。

「それで、あんたたち誰です？」

「ああ、まだ名乗っていませんでしたね。私たちは、アラルフラ『紅き翼』」

「あそこでぶっ倒れてるのが一応リーダーのナギ・スプリングフィールドじゃ」

「そして私がアルビレオ・イマ」

「わしはフィリウス・ゼクトじゃ」

「俺は近衛詠春だ。よろしく」

いい人たちみたいだ。

けどとりあえず、スタンドのことは隠しておくべきかな…

「ところで、あなたは何故ここに？」

「…気がついたらここにいたんですよ」

「？ どういうことだ」

「いつの間にかここにいました。それ以前のことは覚えていません」

そういうことにしておいた。

ただし、自分の名前や魔法があることだけは覚えておくことにして。能力についてははぐらかした。

彼らは、そんなぼくを仲間にならないかと誘った。

この世界で右も左も分らないぼくは、快くそれを受けた。

e
s
)
(
EDITORIAL
Get Back
by The Beatles

第一話 『魔法世界のジヨジヨ』（後書き）

〈次回予告〉

彼は戦争に巻き込まれた。

新たな仲間を得た彼らは戦場を駆け抜ける。

そして見えてくる真の敵。

彼の辿り着く先は？

次回、「忍び寄る組織！」

「…君たちは少しやりすぎたよ。悪いが退場してもらおう」

〈スタンド簡易解説〉

『ルール』

- ・スタンドは生命力、そして精神の具現である。
- ・スタンドはスタンド使いにしか見えない。
- ・スタンドにはスタンドでしかダメージを与えられない。
（ただしスタンドから触れた場合は除く）
- ・スタンドが傷つくと本体も傷つく。
- ・スタンドは本体の意思により動く。
- ・本体から離れられる距離に限りがある。

『スタンドパラメータ』

【破壊力】直接的な攻撃力。物を殴って与えられるダメージなど。

【スピード】スタンドの機敏さ。ラッシュの速さや身のこなしなど。

【射程距離】スタンドの本体から離れていられる距離。

【持続力】 スタンド能力を維持、発動できる長さ。

【精密動作性】 スタンド自体ができる動きの緻密さ。

【成長性】 これからスタンドが進化する可能性。

『ゴールド・エクスペリエンス』

【パラメータ】

破壊力 - C スピード - A 射程距離 - E (2 m程度)

持続力 - D 精密動作性 - C 成長性 - A

【特徴】

・ 近距離パワー型スタンド。

・ 人型。胸、腰、手の甲にてんとう虫型の飾りがある。

【能力】 能力射程 - A (数百m以上)

「生命を生み出す能力」

・ 手で触れることにより、生命を与える。

・ 物質に生命を与えると、生物になる。

・ 産める物は植物と動物のどちらも可能。

(その姿は本体のイメージにより決定する)

・ 産んだ生命への攻撃は攻撃をした者に返る。

(返さない生命を産むことも可能)

・ ただし高等な生物を産むことは不可能。

(主人公はスタンドパワーで強引に可能にしている)

・ 生物に生命を与えた場合、感覚が飛び出して意識だけが暴走する。

(その際、時間感覚がスピードアップする)

(この能力射程はスタンド自体と同程度)

・ 植物などなら命を与え続け枯らすことができる。

・ 生む生命の習性などは本物と同じ。

(環境によっては生物が生まれない。例：超低温 or 高温)

・ 体の部品を作って傷を埋め、治すことができる。

(埋めるだけであって、治るまで痛みはある)

第二話 『忍び寄る組織！』

ぼくは今、戦争に巻き込まれている。

お節介な仲間たちのせいだ。

と言っても、ぼく自身乗り気になってしまったのは事実だが。

本来ならばくらが戦争に介入することはないはずだった。

だが、世界を救うとは言わないが、ぼくが関わった人たちの力になりたいと思ったのだ。

ここに至るまでを少し説明しよう。

あれからぼくはナギ達と旅をした。

その最中、ジャック・ラカンと名乗る傭兵らしい男に襲撃された。

鍋料理の最中だった。

彼の攻撃は鍋を吹き飛ばし、近くにあったぼくの畑（一日菜園）も吹き飛ばした。

ぼくの畑は馬鹿にぶつ壊される運命なのだろうか。

プツンしたぼくは詠春と一緒に彼に襲い掛かっていた。

と言っても、詠春はお色気作戦であっさりやられたので、ぼく一人で戦うことになった。

まあ実際はカウンター生物で瞬殺だったのだが。

それからラカンが目を覚ました後、ナギとラカンがバトルを始めた。13時間戦い続け、お互いボロボロになるほどだった。

引き分けと言うことでその場は引いたラカンだが、それから何度も襲撃してきた。

……ここからがよく分からないことなんだが。

「あ…ありのまま　今　起こった事を話すぜ！

『おれたちは　ラカンに狙われていると
思ったら　いつのまにかラカンが仲間になっていた』

な…何を言ってるのか　わからねーと思うが
おれも　何が起きたのか　わからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…

戦友だとか気が合ったとか
そんなチャチなもんじゃあ　断じてねえ

もつと馬鹿馬鹿しいものの片鱗を味わったぜ…」

といった感じが。

まったくわけがわからなかった。

とにかく、そうしているうちに何故か戦争に関わることになった。
戦争の始まりは少し前。

ヘラス帝国という国がほかの国々に対して侵攻を開始したのだ。
目的はウェスペルタティア王国の王都オスティアを奪取することだった。

ヘラス帝国の民は『古き民』と呼ばれている。
どうやら古き民の文明の誕生の地がそこらしい。

本来ならばよくがそんな戦争にかかわるはずはないのだが。
リーダーのナギがアレだからこうなるのも必然なのかもしれない。

そんなこんなで今は戦争の真っ最中なわけだ。
最近の一番大きな戦いは『グレートブリッジ奪還作戦』…だったかな。

ゴールド・エクスペリエンスは補助がメインの能力なので、ウェザー・リポートで行った。

ぼくは初め、集中豪雨の水圧カッターや竜巻などを起こして、敵に立ち向かった。

のだが、戦艦が水圧カッターで切れ、竜巻で宙を舞った時は啞然とした。

この世界では魔法が主武装なためか、純粹な自然の攻撃にあっけないほど弱かったのだ。

最も、スタンドパワーの概念が無いせいもあるかもしれないが。
そのことを理解したぼくは、圧縮した空気を上空から思いっきり叩き付けることにした。

面白いほど簡単に戦艦は落ちていった。
死人はあまり出ていないだろう。

わざわざ船尾を狙っていたのだから。

その後、ぼくに『歩く天災』や『自然の化身』、『黄金の風』などの異名がついてしまった。

随分と大層な異名だ。

だが少なくとも『歩く天災』はむしろナギやラカンのほうだと思っただけだ。

周りの被害や攻撃範囲的な意味で。

後、どうでもいいことだがぼくファンクラブができたらしい。嬉しいのだが、戦争のおかげと考えると複雑だ。

そして紅き翼に新たなメンバーが入る。

ガトウ・カグラ・ヴァデンバーグ。渋いヒゲのおじさんだ。気と魔力を合一させ、爆発的な力を得る究極技法『アルデマアイト咸卦法』の使い手だ。かんがほう

タカミチ。ガトウにくっついてきた少年だ。クルト。同上。

彼らを加えてぼくらは多くの戦場を駆け抜けた。

途中で魔法も多少は教えてもらった。

ぼくには魔力が意外とたくさんあるらしい。

どのくらいかと聞いても教えてくれなかったが。

ぼくは真つ先に障壁と飛行の術を覚えた。

いくら死にくい体でスタンドがあるといっても限界がある。ぼく本体を守る力が手に入ったのは本当にありがたかった。

ある日、ガトウが情報を持ってきた。

コスモエンテレケイア

『完全なる世界』という秘密結社がこの戦争の黒幕らしい。

戦争の原因ヘラス帝国やそれに対抗する他国の連合『メセンブリーナ連合』。

そのどちらの中枢にも『完全なる世界』がいるとのことだ。

もしそうならば、何の権力も持たないぼく達ではどうしようもできない。

この事態をよく思わない、権力者の後ろ盾が必要だった。

そしてその頃、ぼくの中にある思いが芽生え始める。

後ろ盾のことを考えていたところ、ぼく達はガトウに呼び出された。

「何だよガトウ。わざわざ本国首都まで呼び出してさ」

「あつてほしい人がいる。協力者だ」

「協力者？」

「そうだ」

ナギの言葉にそう答えた人物は。

「マクギル元老院議員！」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ」

元老院議員が後ろを振り向く。
誰かが階段を上がってくる。

「ウエスペルタティア王国…アリカ王女」

それは、ローブに身を包んだとても美しい人だった。
ラカンが早速声をかけて下衆呼ばわりされている。

「はじめまして。 お会いできて光栄です」

とりあえず挨拶をする。

「ふん」

それだけか。

ウエザーの帽子をかぶる。

「蹴り殺すぞ」

「ジョルノ！？ど、どうしたのじゃ！？」

「おい、ジョルノ！なんだよその姿！」

「変な立ち方だなオイ！」

「その帽子はなんです？」

「王女に向かつてなんて言葉を……！」

仲間の言葉は無視する。

「こっちは協力者なんだからもつと誠意を見せろよ。」

俺たちとあんたはこれから一緒に戦う仲間なんだからな」

「む………すまなかった」

思ったより素直に謝ったな。

意外だ。

意固地になると思ったんだがな。

帽子を脱ぐ。

「……っふう。 分かってくればいいんです。」

これからぼくたちとあなたは一蓮托生。どうぞよろしく願います。

……… どうしました、皆さん。 そんな顔をして」

この後質問攻めにあつたが、すべてスルーした。

質問なんて無駄だから嫌いなんだ。 無駄無駄………

調査を進めるが、一向に『完全なる世界』の正体が分からない。

作ったのは死の商人達でも国際マフィアでもない。

もっと別の何かだというのは分かっている。

だが、その謎の『彼ら』が何を目的としてこの組織を作ったのかは謎のままだった。

そんな中、ぼくは『完全なる世界』という名前に嫌なものを感じていた。

まるでこの世界が不完全であると言いたいかのような名前。

もちろん完全な世界などありはしないのだが、そういったことではなくもっと別の何かをぼくは感じていた。

紅き翼は独自に内偵をやることになった。

ぼくも参加することになったはずだったのだが。

「何でもがここにいるんですか」

「ハッ、お前の帽子が便利だからに決まってんじゃないか」
「あきらめて私たちに付き合え」

ナギとアリカ姫のデート（だと思っ）に付き合わされている。

不用意に帽子に物を仕舞うところを見せてしまったからだ。
要するに荷物持ちなのだ。

だが逆らっても仕方がないので付き合うことにする。

小さなものは帽子の中に。

大きなものはスタンドに持たせる。

魔法が認められている社会ならこつも堂々とスタンドが使えるのか。うれしい限りだ。

だが…あの二人の後ろを歩くのはどうも居心地が悪い。

「帰っていいですか」

「買い物はまだ終わっておらぬぞ」

「逃げんじゃねえぞ。逃げたら俺がそれ持たなきゃいけないんだからな」

ぼくは逃げていいはずだ。

だがそれを実行する前にぼくたちは襲撃された。爆発がぼくたちを襲った。

「大丈夫ですか、ナギ、姫」

エアバッグで包んでおいたが一応聞いておく。

「ああ、無事だぜ」

「大事無い」

「そうですか。………ようやく向こうから手を出してくれたようだ。これでぼくたちから攻めることができる」

誰に聞かせるでもなく呟く。

「ナギ、姫をつれて一旦戻ってください」

「ああ！？ この状況を見て逃げろっていつのかよ！」

「違います。 ぼくがやつらを追います。」

あなたたちは退いた振りをして奴らの先回りします」

ということとは、だ。

「つまり……ハサミ討ちの形になりますね」

「…面白え！ やってやるよ！」

「姫も行くんでしょう？ 一人残るのは危険ですしね」

「勿論だ」

そしてぼくたちは襲ってきた敵の本拠地を叩き潰した。

相手も粘ったが、全力全開でウエザー・リポートの風圧パンチを振り下ろしたら、敵のアジトが吹き飛んだ。

つくづくDIOのスタンドパワーは異常だったのだなと思う。

帰ってきたら詠春に怒鳴られた。

と言ってもあの状況ではああするしかなかった。

そのことを説明すると分かってくれた。

敵の情報も見つけてきたのであまり説教は長引かなかった。

それは、メガロメセンブリア（通称MM）の執政官が『完全なる世界』と通じていることを証明するものだった。

ガトウを通じてマクギル元老院議員と連絡を取り、法務官を通し公の場で執政官を弾劾する。

そうすれば『完全なる世界』の存在が表に引き出され戦争は終わる。アリカ姫も帝国第三皇女に接触する予定だった。ようやく戦争が終わる。

そのはずだったのだ。

そしてマクギル元老院議員の元にぼくたちは来た。そこでぼくは『奴』に出会った。

「マクギル元老院議員」

「ご苦労。証拠品はオリジナルだろうね？」

「ハ…法務官はまだいらっしゃいませんか」

議員の問いにガトウが答える。
だが、ガトウの問いに議員は。

「法務官は…来られぬこととなった」

そう答えた。

「……………ハ…？」

「…あれから少し考えたのだね。折角の勝ち戦だ。ここにきて…慌てて水を差すのもどうかと思ってね」
「ハア」

「いや…その、私の意見ではない。　そう考えるものも多いということだ。　時期が悪い」

こいつ…。

（ナギ、分かっていますか）

（ああ）

「あんた…マクギル元老院議員じゃ…ないな。　…誰だ？」

「…何を言っているんだね？」

「本物のマクギル議員の一人称は『わし』だ。　ナギ」

「おう」

ナギがマクギル議員（偽）の顔を爆破する。

「…よく分かったね、黄金の風、千の呪文の男。

こんな簡単に見破られるとはもう少し研究が必要なようだ」

それは白髪、制服のような服を着た青年だった。

「本物のマクギル議員は、残念ながら既にメガロ湾の底だよ」

「てめえっ！」

ナギが飛び出す。

だが青年の前に現れた二人の男がそれを迎え撃つ。

「！？」

「通しませんよ」

「くらえ」

大きな力の衝突による爆発。

ぼくも飛び出した。

「ナギ！」

「くっ、無事だ！」

だがその時、目に入る。

青年の隣にもう一人青年がいた。

「……………」

背筋が凍った。

マジで『ケツの穴にツララを突っ込まれた気分』だった。

そいつは黒い髪に蒼い目をしていた。

服は学生服。

どこにでもいるような青年だ。

だがヤバイ。

「さ…」

こいつは、ヤバイ！

「下がれエ——ツ！！ナギ——ツ！！！！！」

「な、何だッ！？」

咄嗟にナギは後ろに飛ぶ。

ヤバかった。

危機一髪だった。

あのまま突っ込んでいたらばくもナギも死んでいた。

物凄い殺気だった。

あいつには今まで戦ったどの敵とも違う凄みを感じたッ！

エンジン音だけ聞いてブルドーザーだと認識できるようにわかった！

「おい、どうしたんだよジョルノ！ 何があっただんだ！」

「……………」

黙って奴を睨み付ける。

こいつには一瞬の油断も出来ない。

だが、ぼくはそいつを警戒するあまり隣の青年を忘れていた。

「わ、わしだ！ マクギル議員だ…うむ、反逆者だッ！

ああ、うむ、確かだ。 奴らに暗殺されかけたっ…は、早く救援を頼むッ！

紅き翼は帝国のスパイだった！ 今も狙われている、軍に連絡をッ…！」

白髪がマクギル議員の声で連絡を取る。

「げ」

「やられたな」

「「おおおっ！…！」」

ナギとラカンが突っ込む。

「…君たちは少しやりすぎたよ。悪いが退場してもらおう」

「！？ しまつ…！」

そしてその場であの青年を倒しきれなかったぼくたちは、反逆者として追われることとなった。

今まで味方だった連合の軍を吹き飛ばすわけにもいかないので逃げるしかなかった。

あの無表情な少年、次に会ったら『感覚暴走＋ラッシュ』を叩き込むことにしよう。

だが、問題はむしろその隣にいた奴だ。

…これはぼくの勘でしかないのだが、あの目は何かヤバイ感じがした。

あいつだけ他の奴らとは何か毛色が違った。
嫌な予感がするのだ。

あいつのことを考えると。

そうして裏切り者になったぼくたちだが、更に悪いことにアリカ姫も『完全なる世界』の手に落ちてしまう。

ぼくたちは辺境を転々としながら、アリカ姫救出のため、彼女が捕らえられている『夜の迷宮』ノクティス・ラビリントゥスに向かった。

これはそんな最中のある一日の光景。

朝。

俺はゆつくりと宿屋の二階から降りてきた。

今の姿はウエザーだ。

こっちの姿がまだ誰にも知られていないのと、元の『俺』に近い話し方ができるという理由からだ。

「うぐ、頭が割れそうだ…」

俺は今絶賛二日酔い中だ。

いや、犯罪者に仕立て上げられて自棄酒したわけじゃあない。俺自身はきちんと二日酔いにならない程度に酒を飲んでいたが、あいつらが…。

「おい、ジョルノ。何ちまちま飲んでるんだよ」

「…ラカンか。別にいいだろ、蹴り殺すぞ。俺は俺のペース飲みたいだけだ」

「おいおい、酒は皆で楽しく飲むモンだぜ？ …よっしゃ、飲み比べでもすつか！」

「お、いいじゃん！俺も参加するぜ！」

などと言ったからだ。

いや、俺はあいつらが酔ってきてもたいして酔っていなかったんだが、最後に持ってきた酒がヤバかったんだ。

「最後はこれで勝負だ！」

「ジャック、これどんな酒だ？」

「いや、俺様も飲んだこと無いからよく知らん」

「…まだやるのか？」

「「勿論だ！」」

「いいだろう、これで最後だからな」

中身は蜂蜜酒だった。

あれはヤバかった。死ぬ。吐き気で。

それを飲み比べに使ったものだから、悪酔いで全員ダウンしてしまった。

そして今に至るわけだ。

追われている身なのにこんな事をしているのかと思うが、こいつらだから仕方ない。

テーブルについて水を貰う。

頭痛がする…は、吐き気もだ！っていうのはこついう事が…。

水を飲むところなしか気分が楽になった。

そして、もう一杯水を貰おうとしたときだった。

「おい、そこの変な帽子」

呼ばれたので、仕方なく振り向く。

「そこは俺様の指定席だ。どきな」

ハゲの大男がいた。

いかにも漫画とかに出てきそうだな…。

いや、今の俺も漫画のキャラの姿だが。

「聞こえてんのか!？」

「聞こえている耳元で喚くな喧しい蹴り殺すぞ」

二日酔いにてめーのダミ声は不快感二割り増しだ。

何が悲しくてこんなハゲに絡まれなきゃあいけないんだ。

「てめえ、さつさとどけつて言つてんだよ!」

「……この店では、指定席なんてあるのか？」

宿屋の主人に聞く。

全力で首を横に振っていた。

「じゃあ俺が退く必要はないな…」

いつもなら別の席に移っただろうが、歩くのも面倒な今、俺は退く気にはならなかった。

「…力尽くで放り出されてえらいな」

本当に台詞が陳腐だ。

いや、コイツの頭が単純なだけか。

「そう言うならやってみろ…」

俺も喧嘩腰になってしまっていた。
イライラするんだよ、こういう声を聞くと。

「てめええええええつ！」

殴りかかってくる。

魔法で身体強化しているのが分かる。

確かにでかい口ただけあるな。

魔力量も練度もたいしたもんだ。

大抵の奴は小さくないダメージを受けるはずだ。
並の奴ならな。

「な、なんだこりゃあ!？」

ハゲの拳を受け止めたのはエアバッグだ。

意外とうまくいく物で、物理攻撃はだいたいこれで防ぐことが出来る。

しかも爆風などの衝撃、火炎・吹雪などの温度変化にも対応できる
優れ物だ。

ラカンがデコピンで破ってくるが。

バグキヤラめ。

「次はこっちの番だな」

宿屋の入口とハゲの間に何も無いことを確認。
ウェザー・リポートがパンチを繰り返す。

「ぎにゃああああああ！」

風圧でハゲは吹っ飛んでいった。
と言うか、なんだその悲鳴は。

…まあとにかく、そうして朝は終わったのだ。

そして昼。

「見つけたぞこの野郎！」

「…どうしてこうなった」

俺は二十人ほどの集団に追い掛け回されている。

朝の仕返しというわけだ。

いちいち付き合つのも面倒なので空に飛び上がる。

「待ちやがれ！」

「断る」

全員が追ってくるが、追い風を起こしてこっちの飛行速度を上げる。
十分離れたところで今度は向こうの方に向かい風を吹かせた。
しかも強風で。

「糞、一体どうなってやがんだ!？」

「進めねえ！」

「…落ちろ」

圧縮空気（イメージは某ラノベのエア・ハンマー）で順に叩き落していく。

全員叩き落してから、地面に降りる。

「やれやれ」

これでもう追ってこないだろう。

そして夜。

「逃がさねえぜ、この野郎！」

「甘かったか……」

今度は百人ほどになって襲ってきた。
だがまあ。

「おいおい、面白そうなことやってんじゃねえか」
「俺様も参加するぜ」

ナギとラカンがいるからいいがな。

馬鹿は馬鹿に任せるに限る。

そうして俺は宿屋に荷物をまとめに行った。

だが、ナギとラカンがやりすぎて更に紅き翼が追われることとなる
とは、このときの俺は考えもしなかったのだった。

Style Change ↓ Giorno

そしてようやくアリカ姫救出。

予定よりも大幅に遅れたが、仕方ないだろう。

馬鹿二人が大暴れしたせいだ。

しかし相変わらずの無双っぷりだ、うちのメンバーは。

警戒態勢で警備している『夜の迷宮』に正面から乗り込んだのだから。

そしてナギが壁をぶち破って姫が閉じ込められているところまでたどり着く。

「よお、来たぜ。 姫さん」

「遅いぞ、我が騎士」

この二人は本当にお似合いだな。

いつそのこと結婚してしまえばいいのに。

そしてぼくたちは隠れ家まで戻ってきた。
船から下りる。

ぼくは船の操舵手&留守番だったから、帝国の第二皇女を見るのは初めてだ。
ちよつと期待している。

だがその皇女は、

「これが紅き翼の秘密基地か。 どんな所かと思えば…掘立小屋ではないか！」

とのたまった。

おまけにまだ小さな子供だ。

失望でちよつと口調が乱暴になってしまった。

「ぼくら逃亡者に何を期待してたんだ？ この子供は」

「何だ貴様、無礼であろう！」

無礼、ね。

「助けてもらったくせにふんぞり返るような人に払う礼儀はないね」

「何い？貴様、何者だ！」

「ブローノ・ブチャラティ」

真顔で嘘を言う。

「ん？そんな奴、紅き翼におったか？」

「もちろん嘘だ」

「むきー！」

皇女は顔を真つ赤にして怒る。

「本当はフィリウス・ゼクトだ」

「ほ、ほう、お前が…」

「それも嘘だ」

「うがーーーーー！！」

飛び掛られた。

だが、ウェザー・リポートのエアバッグで皇女の手はぼくに届かない。

しばらく悪戦苦闘した後、皇女は息を切らして諦めた。
そこに声をかける。

「名前を聞くんらまずはじめにそっちから名乗ったらどうだ？」

「…テオドラじゃ」

「ジョルノ・ジョバァーナだ」

「お主が『黄金の風』か、なるほど…噂どおりみたいじゃの」
「噂？」

噂されるようなことなんてあるだろうか。

「（ニヤ）…聞きたいか？」

「いや、どうでもいい」

「そうかそうか、聞きたいか！　そこまで言っなら…って、くうー
ーっ！…！」

地団駄踏む皇女。

…これは、いけるか？

「…次にあんたは『なんなんだ、貴様は！』と言う」
「何なんじゃ、貴様は！…………ハッ！」

おお、リアルジョセフが出来た。

これはいい。

からかいがいがありそうだ。

とか何とか言っている間に、ナギと姫は誓いを交わしていた。
いや、夫婦^{めおと}じゃなくて主と臣下のやつだ。
しかしこの二人は絵になるな。

そしてぼくたちの反撃が始まった。

姫たちが調べ、判明した敵をぼくたちが潰していく。
しかも、姫たちのおかげで味方も増えてきていた。

そんな中、ぼくは時々単独行動であることをしていた。
この計画は未来へつながる布石だった。

正直、こういうのは苦手なのだが仕方ない。

ぼくは誰にも知らせることなく、一人で計画を進めていった。

そして月日は流れ、ぼくたちはようやく『完全なる世界』との最終決戦に漕ぎ着けたのだ。

最終決戦の場所はウエスペルタイア王国、王都オスティアの空中王宮最奥部『墓守人の宮殿』だった。

「EDテーマ『VOODOO KINGDOM』 by『SOU
L・d OUT』」

第二話 『忍び寄る組織!』（後書き）

〈次回予告〉

最後の戦いに赴く彼。

そこで彼は自らと同じ境遇の者に出会う。

対立する組織に属する二人。

争いは避けられない。

戦いの行方は。

次回、「スタンド VS ・ 直死の魔眼」

「さあ… 殺し合おう」

〈スタンド解説〉

『ウェザー・リポート』

【パラメータ】

破壊力 - A スピード - B 射程距離 - C（5 m程度）
持続力 - A 精密動作性 - E 成長性 - A

【特徴】

- ・ 近距離パワー型。
- ・ 人型。頭に数本の短い角がある。
- ・ 周囲の空気中の水分と一体化している。

【能力】能力射程 - A（1 m未満）数十 km）
『気候を操る能力』

- ・気流や雨、稲妻を自在に発生させて操ることが出来る。
（雲による水分吸収、空気摩擦による発火 e t c）
（範囲は1 m未満から町一つ分まで自在）
- ・怪雨（ヤドクガエルが降るなど）を起こすことが出来る。
- ・本体に近いほど精密な天候操作が可能。
- ・応用範囲が極めて広い。
- ・至近距離では強烈な風圧を纏ったパンチを繰り出せる。
- ・作った雲を拡散し、気流の変化などを感知できる。
- ・気密性を持つ「雲のスーツ」を作ることが出来る。

第三話 『スタンド VS ・ 直死の魔眼』

風が、吹いていた。

吹き荒ぶ風を身に受けて、彼は今までのことを思い出す。

仲間と駆け抜けた戦場を。

応援してくれた人々を。

戦い撃破した強敵を。

長かった。

だが、それもここで終わる。

『完全なる世界』の崩壊か、世界の消滅か。

…あるいはその両方という形で。

Side 【Giorno Giovanna】

『墓守人の宮殿』の全容を見晴らせる場所にぼくたちは立っていた。

「不気味なくらい静かな、奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

腕を組んで立っているナギと剣を担いで屈んだラカンが言う。

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました」
「おう」

向こうからアリアドネーに属する女性、セラスが走ってくる。

アリアドネーとは、北の連合・南の帝国どちらにも属しない中立勢力だ。

だが、今までのぼくらの働きで今ここには、帝国・連合・アリアドネーの全ての勢力がいる。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が本丸に突入出来る。」

頼んだぜ！」

「ハッ…それで、あのナギ殿」

「ん？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか」

「おお？ああいいぜ、それくらい」

「そ、尊敬していました」

ラカンはそんな様子を見て大笑いしていた。

サインか。まあ、こんな時にそういうことができるのは良い傾向だ。

ぼく達は死に行くのではない。

生きて帰ってこなければならぬのだから、その位の気持ちで行った方が長生きできるかもしれない。

そこに連合・帝国、両陣営の説得に行っていたガトーからの連絡が来た。

「連合の正規軍の説得は間に合わん。

帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。

決戦を遅らせることはできないか？」

それにアルと詠春が答える。

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ。彼らはすでにもう始めています…『世界を無に帰す儀式』を。」

世界の鍵『黄昏の姫御子』は今、彼等の手にあるのです」

そして、ぼく達は行く。

最後の戦いの地へ。

「よしっ、野郎ども！　いくぜっ！！」

「「「「「おおっ！」「」「」「」

混成部隊が外周の敵を抑えている内に、ぼくたちは宮殿の中に突撃した。

「やあ千の呪文の男。これで何度目だい？

ぼく達もこの半年で随分と数を減らされてしまったよ。

この辺りでケリにしよう」

そこで、奴らが待ち構えていた。

そして、『奴』も。

それぞれが相手を見つけ出し飛び出す中、ぼくと『奴』は向かい合
って立ったままだった。

奴が口を開く。

「ようやく、会えたな」

「……………」

「待っていた、お前のような存在を」

「生憎だが、ぼくにはソツチ系の趣味はないんだ」

くすくすと奴は笑う。

「お前は、俺と同じだ」

「…何だって？

どこが同じだっていうんだ」

奴はそれには答えずにぼくに背を向けた。

「ジョジョの奇妙な冒険・第五部『黄金の風』。
主人公の名前は…そう、【ジョルノ・ジョバァーナ】。
お前の名前と一緒にだな」

「！？」

「分かっただろう？」

「お前も俺も、この物語のイレギュラーだ」

「…あんた、何者だ！」

「そうだな…今は『七夜^{ナナヤ} 志貴^{シキ}』と名乗っている」

「…前の世界では？」

「前の世界はもう関係ないだろう？」

奴は両手を広げてこっちを見る。

「本来ならば俺達はこの存在してはいけない者、『物語の外』から来た者だ」

「この身に異質な力を宿して、この世界で何を為すか」

「俺は考えた」

「そして俺は選んだ」

「この魔法世界を壊す道を」

ぼくは口を開いた。

「お前も『この世界ではない世界』から来たと言っのか」

「ああ」

「…何故お前はそいつらに味方するんだ」

奴は綺麗な顔で笑った。

綺麗ではあったが、その顔は明らかな狂気を宿していた。

自分の信じるモノのためなら犠牲に頓着しない奴だ、こいつは。

「この世界の本来の歴史、それでは『ここで紅き翼が勝つ』ことになっっている。

そしてその結果、多くの幸福と不幸が生み出されることに。

だが、俺はそれを覆したくなった。

…それだけだ」

「…その果てにどれほどの命が失われるのか解っているのか？」

押し殺した声で聞く。

こいつは、本当に…

「解っている。

だが、それがどうした？

この魔法世界の命はどうせやがて失われる命だ。

どれほど失われようと俺には関係ない。

重要なのは『この世界の歴史』を変えることだ。

魔法世界の住民の命なんて重要じゃない」

「命が重要じゃないだつて？」

馬鹿なことを言うな、彼らは生きているんだぞ。

血は流れているし、息もしている。

たとえここが魔法世界でも、物語の中の世界でも、生きていることにかわりは無い！

やがて失われるからといって命の価値に差など無い！」

解った。

奴は現実いまを生きていない。

奴は『魔法世界の人々の命を命として見ていない』。

『自分の目的のためには、この世界の命が失われたっていい』という究極の自己中心的思考。

歪んでいる。

ぼくには…救えない。

「…このぼくは『前世』で普通の男だった」
「？」

「普通に生まれたし、普通に生きた」

「ただ、その中で懂れたものがある。
それが『ジョースターの血統』だ。
彼らは誇り高く正義の道を生きた」

「それを貫き通せるだけの力と意志を持っていた。

今、ぼくの中にはその『血』が流れている。

その『血統』に恥じないようぼくは生きると誓った」

「……それで？」

「だからその誓いに従ってぼくはあんたを止めなきゃならない。

『生きようとする人々の命の重さ』がわからないあんたを。

……あんたの『罪』はぼく以外の誰にも分らないし、理解できない。

だから——」

覚悟を持ってその言葉を紡ぐ。

今までのような戦いではない。

初めてぼくが『殺す覚悟』を持って臨む戦い。

——『俺^{ぼく}が裁く！』——

「ふふ、いいぜ。

お前がそう言うてくれることを俺は期待していたんだ。

『同じ境遇の二人が対立する』——

こんなに面白い見世物の登場人物になれるなんて滅多に無いことじゃないか。

——「さあ、殺し合おう」

「ゴールド・エクスペリエンス
GE！」

ぼくの分身が奴に殴りかかる。

この世界でスタンドが見える者はいない…はずだ。
故に、このラッシュを捌ききれる者は少ない。

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄ッ！」
「…くっ」

奴が持つナイフを掻い潜って何発かは入ったが、浅い。

おまけに間合いが開いたので『感覚暴走』も食らわせられなかった。

「なるほど、それがスタンドか。確かに見えないな。…普通なら」

奴の瞳は蒼く輝いていた。

さっき、奴は『スタンドがいる場所を見ていた』。

そして『ラッシュもある程度見えていた』ようだ。

何故だか分からないが、奴はスタンドがいる場所が分かるらしい。
あの眼に何か秘密があるのだろう。

「その眼…何だ？」

「流石、分かるか。」

だが、教えてはやらない」

そのままこちらに駆けて来る。

「GE！」

木の根で足元を狙う。

「ふっ」

ナイフで切り払われた。

だが、GEが生命エネルギーを注ぎ続ける限り成長は…！？

「な、何っ！？ 木の根が成長しない！？」

「ふふっ」

「！」

しまった！

近付け過ぎた！

「疾！」

「おおお、ゴールド…！」

下から迫るナイフをGEで弾こうとして、

ぞくり

悪寒がした。

「ウエ、WR…！」
ウェザー・リポート

自分に風を当てて思いっきり跳び退く。

「へえ、勘がいいんだな。」

あのままいつてれば、お前の腕は落ちていたのに」

「……………」

あの眼は何だ？

何故スタンドが見える？

何故ああも自信満々に戦える？

…確かめなければ。

「行けっ！」

瓦礫を拾い、蜘蛛にして投げつける。

毒持ちで、かつカウンター能力持ちだ。

「ふっ」

だが蜘蛛は一閃され、元の瓦礫に戻った。

カウンターは発動していない。

一体何故だ？

GEが生み出した生物への攻撃は、そのまま攻撃したものに返るはずなのに。

「来ないのか？

ならこっちから行くぞ」

まずい。

あの眼の能力を確かめなければ、ぼくは奴には勝てない。

そもそも戦闘場所が悪い。

こんな屋内ではWRの能力を十分に発揮できない。
今は逃げるしかなかった。

「GE！」

床を植物に変えて下の階へすり抜ける。

その直後、元の床に戻して道を塞ぐ。

だが、奴はバターか何かを切るように床を切り裂いて追って来た。

「逃げるなよ。」

もつと楽しもうぜ」

「断る！WR！」

圧縮空気を叩きつけた。

が、それも切り払われる。

「ならばこれはどうだ！」

上から圧縮空気、下から木の根の挟み撃ち！

ナイフ一本で対処できるか！？

だが次の瞬間、

「——閃鞘・七夜」

木の根は切り裂かれ、奴が目の前に迫ってきていた。

「うぐう！」

咄嗟に下がったから重傷は避けたものの、奴のナイフは障壁を易々と切り裂き、ぼくの腿を浅く切った。

「ふうん、今のを避けたか」

ナイフを弄びながら奴は言う。

…手も足も出ないとはこの事が。

だが、今までの攻防で奴の能力が少し見えてきた。

物質・非物質関係なく奴は物を切ることができるようだ。

ただ、切り裂く場所には制限があるらしい。

奴は物を切り裂くとき、切る場所を選んでいた。

ぼくがさつき『腿』を切られたのでそれが分かる。

奴の能力なら臆を狙うことも可能な筈だったのだ。

だが、その制約を抜けばどんなものでも切ることができるようだ。

奴の眼はそのための『何か』が見えているに違いない。

そして、奴が切った木の根はそれ以上成長しなかった。

だからおそらく、ぼくが切られればGEで体の欠損を埋めることはできないと予想できる。

埋めても魂に『馴染まない』だろう。

だとすれば、相手の攻撃を受けるのはこっちが不利になるだけ！

「おおおおっ！」

奴に駆け寄り、GEの拳で殴りかかる。

奴はそれを受け流し、逆に切りかかって来た。

「無駄ア！」

ナイフを横から殴って弾く。

奴はその反動すら利用して更にぼくを攻め立てる。

風圧を纏ったパンチは、妙な体術でかわされる。

姿勢を低くしたと思ったら、次の瞬間には別の場所にいるのだ。

更に奴はその体勢からこつちに切りかかってくることもある。

攻めてもすぐに攻守逆転されることが何回か続いた。

奴の攻めに耐え切れず、たまらずぼくは退いた。

「どうした？もう逃げるしか手が無いのか？」

奴の言葉が背後から聞こえてくる。

だがぼくは振り返らずに走り続ける。

「GE！」

木を生み出し、天井まで上る。

その際、後ろに『魔法の射手』を無詠唱でばら撒いた。

まだ慣れていないから十数本が限界だが、意外とこれは役に立つ。

天井を形作る石材を砕き、何十匹もの八手を生み出す。

更に天井に開いた穴を通り上の階へ。

そんな攻防がしばらく続いた。
ぼくは、逃げるしかなかった。

「ハア、ハア……………くっ」

行き着いた先は行き止まりの部屋だった。

「ようやく追いついたぜ。
観念したか？」

部屋の入り口に奴は立っていた。
ゆっくりとこつちに近付いてくる。

「残念だったな。
どうやら俺の勝ちみたいだ。

お前がこれから先のこの世界を見れないことに同情するよ」

にこにこ笑いながら奴はそんなことを言う。
ぼくはようやく口を開いた。

「…殺^やるのか」

「ああ、お前を殺したら次は紅き翼の奴らだからな。

お前との戦いは楽しかったよ。

だから、せめて俺の最高の技で葬ってやる」

そう言っただけはナイフを掲げた。

だが、ぼくは奴の言葉などもう気にしなかった。

ぼくはゆっくり言葉を紡ぐ。

「――極死」

「知っているか？こういう台詞があるのを」

「なな……」

「『相手が勝ち誇った時、既にそいつは敗北している』ッ！……！

！……」

奴は急に大きくよろめき、地に膝をついた。

咄嗟に体を支えようとした手はその役割を果たさず奴は崩れ落ちる。

「こ、これは……！」

「あんたの眼も流石に『これ』は『見る』ことができなかったようだな……。」

ついさっきまで眠っていたウエザー・リポートの能力……。

本で読んだことがある……生物にとって最も身近にある『猛毒』は『空気である！』……と。

生物にとって生きるためには『酸素』が必要だ……。

だがその濃度は空気中では40%以下でなくてはならない……。

100%純粋な『酸素』は『猛毒』で生物を死に至らしめる！！
高濃度の酸素は『鉄』ならアツという間にサビで腐食させ、炎なら爆発し、人体の細胞分子なら電子を奪って次々と組織を破壊していく！！

大量に吸うとまず手足の先から麻痺し、立つことが出来なくなる！
眼球の毛細血管が切れ失明する！

いくら『物を切ろう』と関係ない……『ウエザー・リポート』は天候を操る能力！

すでにこの部屋に純粋酸素を大量に集めていたんだ。

そして意識を失っていく……100%の酸素は……

組織の『内部』へ……『内部』へ……

「ぐ……くそ……おおおおお！」

奴は必死で立とうとするが体は麻痺して動かない。

「ぼくが……何も考えずただ逃げていたと思ったか？

——いいや、違うね。

ぼくはこの能力が目覚めた瞬間からこの部屋を目指していた。

こっちにはオスティアの姫がいるんだ。

ここの構造くらい、既に決戦前に聞いていたッ！」

ゆつくりと、ゆつくりと、奴に近付く。

自分の身を『雲のスーツ』で包んで。

「この能力は……ただあんたと対峙し戦っただけでは目覚めなかっただろう……」

「これはぼくのかじゃあない。『この世界』の皆がくれた能力だ」

「あんたに出会い……あんたの狙いを知って……この能力は目覚めた」

「『この世界の人々』を失いたくないから目覚めたんだ」

「目的をここで告白し、ぼくをここまで追い詰め、この能力を目覚めさせたのは七夜 志貴……」

「あんなんだ」

「生きようとする力は何よりも強い！
あんたは目的のため切り捨てた『この世界の人々』に勝てなかった！」

ゆっくりとウエザー・リポートが奴の頭に拳を押し付ける。
メシメシと音を立てて奴の頭が潰されてゆく。
ゆっくりと、ゆっくりと。

奴は必死で叫ぶ。

「うおおおおおおおおおおおおお！！

こんな事をするなア——ッ！！

俺が手に入れた俺の『能力』は！！

『神』の意志だッ！『神』が望んだ能力なんだッ！

ここから新しい歴史が始まり、新しい世界が生まれるんだッ！

ここで俺が死ねば、『完全なる世界』が敗北すれば、歴史は元に戻ってしまうぞッ！

きっと同じ『歴史』を辿る！多くの人々が不幸になる！

ここで死ぬわけにはいかない！

ここで『完全なる世界』が勝利し、儀式が成功した後なら俺はど
うなってもいいッ！

俺がやってきた事全てが無意味になるんだッ！」

「お前は知らないだろうが、火星に造られているこの魔法世界はや
がて消滅するッ！

魔法世界人は消滅し、人間は生物が住める環境ではない所に放り
出されるんだッ！

そして火星と地球の間で壮絶な戦争が引き起こされるッ！

幾千万の不幸が生み出されるんだッ！
どっちが『幸福』なのか考えてくれッ！
ここで俺は死ぬわけにはいかないんだ——ッ！
」

「知っていたさ」
「何？」

「この世界が幻だということも。

魔法世界の大半の人が幻だということも。

いつかこの世界が消え去ってしまうということも。

——全て知っていたさ。
この戦争中に全てを知った」

「だが、重要なのはそんなことじゃない。
今を生きている人々にとっては、『今』が全てだ。

『この世界』が全てなんだ。
その今を奪うことは許さない。

全ての人の願いを実現させる『完全なる世界』だなんて、ただの夢だ。

夢に、現実において何の意味がある？
それとも覚めない夢なら現実と同じか？

違うね。

現実には、幸福と不幸で成り立っている。
これは変えられない事実だし、運命だ。

——確かに、全ての人が幸福を願うのも事実だ。
だが、

幸福『だけ』を願う人もいれば、

不幸を『乗り越えた』先の幸福を願う人もいるんだ。

あんたたちは、自分達の考えをこの世界の人々に押し付けている
に過ぎない。

それにぼくは立ち向かっているだけだ。

——この世界の人達と共に」

「わからないのか？

あんたは『この世界の人々』に負けたんだ！

ぼくは呼び出す。

「**黄金体験**！」

『覚悟』とは！！暗闇の荒野に！！進むべき道を切り開くことだッ！

「天気予報！」

お前は…自分が『悪』だと気付いていない…最もドス黒い『悪』だ――

「やめろ！ やめろおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお！！！！！！」

完全にウェザー・リポートの拳が床につく瞬間、ぼくはラッシュを
奴に叩き込んだ。

[illegible]

アルが

ラカンが

詠春が

ゼクトが

ぼくに合流した。

ぼくらはまだ戦っているであろうナギの元へ向かった。
誰も何も言わなかった。

それでも十分だった。

そしてぼくらは見た。

戦いに勝ったらしいナギが、
白髪の青年の首を掴んでいたナギが、
青年ごと魔法で貫かれるのを。

「!?!」

「ナ……」

「「「ナギイツ!!!!!!」」」

「誰だ!?!」

ラカンがナギを撃った人物に叫ぶ。

ゆらり、とそいつは現れた。

クラティスデー・アイギス
「いかんツ!最強防護!!!」
ゴールド・エクスペリエンス
「黄金体験!!!」

ゼクトがいち早く危険を察知し、防御魔法を使う。

ぼくはゼクトが張った障壁にカウンター植物を巻きつかせる。
まさに最強防護。

この防御を突破できる者はいない。

はずだった。

敵の攻撃はそれらを一瞬で消し飛ばし、ぼくらも吹き飛ばした。

Side out

その時、凄まじい衝撃が『墓守人の宮殿』周囲を揺らした。誰も、決着が付いたのかと思った。

紅き翼が勝ったのか、と。

しかし、敵はまだ残っている。

自動機械は動き続け、召喚魔は還っていない。

ならば、負けたのか。

その場の皆がその予想を振り払った。彼らが負ける筈が無い、と信じて。

風は、止んでいた。

「 L e d Z e p p e l i n 」
「 E D ティ マ 」
「 S t a i r w a y t o H e a v e n 」
b y

第三話 『スタンド VS ・ 直死の魔眼』 (後書き)

〈次回予告〉

最後の敵、造物主^{ライフメーカー}。

紅き翼は彼の一撃で壊滅状態になった。

圧倒的な力の差。

だが、それでも闘う者がいる。

彼らの闘いの行方は如何に。

次回、「鎮魂歌^{レクイエム}は誰^たが為に奏でられる」

〈スタンド能力UP〉

『ゴールド・エクスペリエンス』

破壊力 C ↓ B

『ウエザー・リポート』

精密動作性 E ↓ D

能力覚醒 純粹酸素を集める

第四話 『鎮魂歌は誰が為に奏でられる』(前書き)

今回の話…つい、やっちゃったんだ

ごめんね、うー

だ、だってクレドの超像可動見てたら昂ぶっちゃったんだもん！
こ、これから見捨てないでね！

第四話 『鎮魂歌は誰が為に奏でられる』

紅き翼は壊滅状態だった。

ナギは肩を撃ち抜かれ。

ラカンは両腕を失い。

アルビレオは魔力がほぼ底をつき。

詠春はナギを庇って重傷を負い。

一番傷が浅いゼクトも小さくはないダメージを負っていた。

そんな彼らをよそに、敵——ライフメーカー造物主は姿を消す。

「待てコラてめえっ!!」

「任せなジャック」

だが、ナギは立ち上がった。

「い…いけませんナギ! その身体では!」

「アル、お前の残り魔力全部で俺の傷を治せ」

「し、しかしそんな無茶な治癒ではッ!」

「30分持てば十分だ」

「ですがッ…!」

そのとき、ゼクトも立ち上がる。

「ふふ、よからう。わしも行くぞ、ナギ。

わしが一番傷も浅い」

「お師匠…」

「ゼクト! たった二人では無理です!」

「ここで奴を止められなければ、世界が無に帰すのじゃ。
無理でも行くしかなかるう」

制止するアルをゼクトは説き伏せる。

「ナギ待て！

奴はヤバイ、奴は別者だ！」

倒れて起き上がれないラカンがナギに言う。

「死ぬぞツ！

体勢を立て直してだな……」

「バーカ、んなことしてたら間にあわねえよ。
らしくねえな、ジャック」

そしてナギは振り向いてラカンに言う。

「俺は無敵の千の呪文サウザンドマスターの男だぜ？

……それに、あいつ一人で奴に立ち向かわせられつかよ！」
「あいつ？……まさかッ！」

アルは周りを見回したが、そこに彼の姿ジョルノは無かった。

「あいつは言ったぜ、先に行くつてな！

俺達は勝つ！！ 任せとけ！！！」
「ナギイツ！！！」

仲間たちが叫んだ時には既にナギは飛び出していた。

Side 【Giorno Giovanna】

ぼくは一人で造物主ライフメーカーと対峙していた。

彼と話がしたかったからだ。

だが、さっきの攻撃は思った以上にぼくの体にダメージを与えていた。

造物主ライフメーカーから感じる重圧プレッシャーで体が砕けそうだと。
忘れていた。

こいつは『この世界を造った』奴なのだ。

生み出した生物は完全に『この世界から切り離された』わけではないから、奴の能力の効果を受けてしまったのだ。

『魔法世界の存在を全て自分の思いのままにできる』能力の。

「ハア…ハア…」

「……何故、お前はこの世界の真実を知らながら私に挑むのだ？」

ヒトに我が身を呈してまで救う価値などあるのか？

何が目的なのだ？」

価値、目的、だって？

「少なくともぼくには、ヒトはこの身を懸けて守る価値がある！ あんたが言う目的がどんなモノを指すのか知らない…。ただ…ぼくは自分の『信じられる道』を歩いていたいだけだ。

…確かに、この世界が消えてしまふのは嫌だ。

だが、ぼくはあんたの言う『完全な世界』を認められない。確かにその世界は不幸なんか何も無いんだろう。けれど、ぼくは知っている。

『幸福』とは『不幸』があるからこそ存在するものなんだ。そんな偽りの世界のために、この世界を消させやしない」

不幸があるから、幸福を喜ぶことができる。

そもそも、幸福とは単なる主観に過ぎない。比較対象が無ければ幸福は存在しない。

ならばその世界の『幸福』は何と比べたものなのだ？

「確かに成立した最初はその世界はうまくいくだろう。

だが、その幸福は永遠には続かない」

「それを続くようにするのが、私の目的なのだ」

その声には、深い絶望が籠もっていた。

彼は、何百年も何千年もこの世界を救う方法を模索したのだろう。

「…あんたは、諦めたのか。

だったら、ぼくがあんたを止める。

あんたは間違っている！」

その時、ナギとゼクトがここに辿り着いた。

「『^{キーリブル・アストラベ}千の雷』！」

ナギの放った魔法が造物主の張った障壁にぶつかる。
^{ライフメーカー}造物主との会話は途切れたが、もうこれ以上お互いに話すことも無かった。

「ナギ、少しでも時間を稼いでください」

「あ？」

「少しでもいいんです…頼みます」

「…わかったぜ！」

だが、その前に俺が奴を倒しちまうかもな！」

＼Side out＼

ナギは一人で^{ライフメーカー}造物主と戦っていた。
^{ライフメーカー}ゼクトはついさっき、造物主の一撃を受け落ちていった。

「おおおおっ！」

敵の魔法を魔力を強引に籠めただけの障壁で突っ切る。

「食らえッ！」

「貴様…！」

魔法を載せた拳を造物主ライフメーカーに叩き込もうとする。

さっき彼に言った言葉は本気だった。

が、造物主ライフメーカーもただ見ているわけではない。

一瞬で幾重かつ巨大な障壁を構築し、攻撃に備える。

強大な魔力同士が衝突し、轟音が辺りを満たした。

轟音を聞きながら、彼は床に屈みこんでいた。

といっても、ゴールド・エキスペリエンスの能力を発現させているわけではない。

彼は、その手に【矢】を持っている。

ただの矢ではない。

それは生物を射抜けば、素質を持つ者にスタンド能力を、持たぬ者には死を与える矢だった。

本来ならばこの世界に存在しないはずの【矢】。

これが、天使達からの最後の贈り物だった。

彼は、震えていた。
それも恐怖で、だ。

（この【矢】を使うのは、今だ…）

彼は躊躇ちゅうちうしていた。

恐れていたのだ。

この【矢】を。

（だが、ぼくにこの【矢】のパワーを支配する資格があるのか？）

【矢】には、もうひとつの使い道がある。

それは『スタンドを【矢】で射抜く』ことだ。

『スタンド』を発現させるために『生物』を射抜くだけではない。

『矢の先のパワー』を得るために『スタンド』を射抜く使い道があるのだ。

【矢】には未知のパワーが宿っている。

【矢】に射抜かれたスタンドは、【矢】に認められれば『全ての生物の精神を支配する力』を得ることができるのだ。しかしその資格がなければスタンドは暴走する。あるいは本体が死に至る可能性もある。

（ここで死ぬわけにはいかない。

…だが、この世界が消えるのを黙って見てもいられない）

彼は、覚悟を決めた。

「ゴールド・エクスペリエンス！」

ゴールド・エクスペリエンスは、自分の胸に【矢】を突き立てようとした。

奇しくもその瞬間、ナギ達の方から魔法が飛んできた。気づいて、はっと顔を上げた時には遅かった。

彼は、閃光に包まれた。

「ジヨルノツ！おい、ジヨルノツ！」

ナギの叫びが響く。

辺りは完全に吹き飛び、跡形も残ってはいなかった。
だが、

「どうやら……【矢】はぼくを認めてくれたようだな………」

彼は無事だった。

すぐ横に傍に立つ者を従え、宙に浮いていた。

ただし、そのスタンドはいつもとは違う姿をしている。

体は朝日の如く輝き、揺ぎ無い瞳は全てを見通すかの如く前方を見つめ、額には【矢】を戴いていた。

「何だ…ソレは…！」

そのスタンドは、ナギにも造物主にも見えていた。

あまりのパワーに普通の人間にも見えるようになっていたのだ。
彼は、厳かにそのスタンドの名を告げた。

「——
『ゴールド・エクスペリエンス・レクイエム
- 黄金体験鎮魂歌 -』」

「ナギ、行きますよ」

「……っ！ あ、ああ！」

彼はナギに指示を出す。

防御は考えなくていいからとにかく攻撃しろ、と。

「奴の攻撃は全てぼくが引き受けます」

「おい、大丈夫なのかよ！」

「大丈夫です。」

どんな能力が、あるいは魔法が相手でも、決してそれがぼくに届くことはない。

…… 先手を打ちますよ」

そう言つて彼はそばに浮いていた石を手取る。

次の瞬間、石は造物主ライフメーカーの障壁を撃ち抜き、その体に傷を負わせた。

「何！？」

ナギも目を見張っていた。

攻撃の瞬間が見えなかった。

彼が石を手に取ったと思った次の瞬間には、石は造物主^{ライフメーカー}を撃ち抜いていた。

「ナギッ！」

「ああ！」

ナギが造物主^{ライフメーカー}の下に入り込み、全力でパンチを放つ。

その一撃は、確実に造物主^{ライフメーカー}の顎を捉えていた。

吹き飛びながら、造物主^{ライフメーカー}は笑う。

「……クック…フフ…フフはは」

黒く禍々しい、巨大と言ってもまだ足りない大きさの魔方陣が造物主の周りに現れる。

「はははははははは！！ 私を倒すか人間。 それもよからうッ！！」

笑いながら魔方陣に魔力を籠める造物主^{ライフメーカー}。

舞い上がる瓦礫を足場に、二人は造物主^{ライフメーカー}に近づいていく。

「私を倒し英雄となれ。 羊達の慰めともなろう」

ナギは、しぶてえ奴だぜ！と吐き捨てた。
ジヨルノが静かにそれに頷く。

「だがゆめ忘れるな」

さらに魔方陣が造物主ライフメーカーの前にも現れる。
一つでなく、何十個も。

「すべてを満たす解は無い。 いずれ彼等にも絶望の帳とほじが下りる」

造物主ライフメーカーはその魔方陣から魔法を放つ。
それは黒い閃光となり、ナギに襲い掛かった。

「貴様等も、例外ではない」

だが、その全てはGERの前に消え去る。
その隙にナギが雷を腕に宿して殴りかかる。

「グダ、グダ、うるせえええッ！！」
「グウオッ！？」

その際放たれた雷は、宮殿の壁面に大きな穴を開け外に飛び出した。
そして、二人は造物主ライフメーカーに向かって飛ぶ。

「たええ！」

「明日、世界が滅ぶと知ろうとも！！」

四つの拳が造物主ライフメーカーの体を削っていく。

「諦めないのが！！」

「人間ってモンだろうがッ！！」

ナギが造物主ライフメーカーを上空に蹴り飛ばす。

GERが瓦礫を大木に変え、造物主ライフメーカーを拘束する。

「くつくく…貴様等もいずれ私の語る『永遠』こそが、

『全て』の『魂』を救い得る唯一の次善解だと知るだろう…」

そんな造物主ライフメーカーの言葉も二人には意味がない。

二人は、人間を信じていた。

「人、間、をッ！」

ナギが杖を変化させ、雷の槍を生み出す。

ジオルノがナギの手にその手を重ね、さらに魔力を籠める。

「「なめるなああああああああッ！！！！」」

二人の手から放たれた槍は造物主を貫き、
ライフメーカー

一瞬の間を置いて、
ライフメーカー造物主を消し去った。

二人は、瓦礫の上に立っていた。

「やったか…」

「いえ、ナギ。まだです！」

まだ儀式を止める作業が残っています！」

「っ、そうだった！急ぐぜ！」

二人は急いで儀式の場所に向かった。

が、遅かった。

既に儀式は完成し、発動していた。

「な……」

「間に合わなかったのか！？」

「クソッ、アルに連絡して……！」

ナギはアルにこの状態を知らせようとしていた。だが、既に儀式は阻止不可能な段階にきていた。世界は終わる。

もう誰にも止められない。

ジヨルノはそれを理解した。

その時、ジヨルノの目の前は真っ白になった。

そこは、何もない真っ白な空間だった。

「またあんたらか」

そこにはやはり二人の男女がいた。

「久しぶりだな」

「何の用だ？ 俺は早くあの世界をどうにかしないとイケないんだが」

「ここから出るまで時間は進みませんから、その点については安心してください。」

「……私達があなたを呼んだのは、その件についてなんですから」
「何？」

女のほうの説明する。

「私達があなたを送った世界には、本来あなた以外のイレギュラーは存在しないはずでした。」

しかし、何の偶然か全く同じ世界にもう一人イレギュラーが送り込まれました」

「あいつか……」

彼はあの少年を思い浮かべる。

「私達とは別の者の仕業でしたが……そのせいで、歴史はさらに歪んでいます。」

……あの儀式が『止められない』という結果になるほどに。

このままでは、平行世界では済まされない世界が生まれてしまい

ます。

ともすると、世界の歪みによって他の平行世界を巻き込んで消滅しかねない不安定な世界が」

彼は首を傾げた。

「おかしい話だ。

それをいうなら歴史とはそういう物だろう。

些細な違いで歴史が決まることはよくあるじゃないか。

平行世界つてのがあったら、さまざまな『if』の数だけあるはずだ」

「お前達が『本来あの世界に存在しないイレギュラー』だから問題なのだ。

あの世界に属する者が歴史を変えたならまだしも、『イレギュラー』では不味いのだ」

「ですから、私達はあなたの存在を『修正者』に変え、歴史を変えさせるためにここに呼んだのです」

初めて会った時とは違う。

あの時は、ただ己の失敗をどうしようかと慌てていただけだったが、今の彼らの顔には使命感が溢れていた。

「仮にも我等は世界を管理する立場にあるのだ。

我等の失態から世界を崩壊させるわけにはいかん」

「二度目のお願いです。

私達に、力を貸してください」

「…………ふう」

彼は苦笑混じりに溜息を吐いた。

「むしろこっちが力を貸して欲しかったくらいだ。
…喜んで」

「あ、ありがとうございます！」

「で？どうすればいいんだ、俺は？」

今の俺にはあの儀式を止める力はないぞ」

「お前に新たな力を与える。

それを使って止めるのだ」

「…ほあ、その力ってのは？」

「これだ」

差し出されたのは、一枚のDISCだった。

「これは…まさか、ホワイトスネイクの？」

「いやちがう。が、似たようなものだ」

「どういうことだ」

「この中には全てのスタンドデータが入っている。

これを使えば、その中から好きな能力を選び出し、使うことができるようになる。

最も、一度に一つ的能力しか使えないがな」

「あと、これを使ってる間はGEもWRも使えませんから注意してくださいね」

「本来ならもつとよい能力を渡したのだが、お前が既にGEとWRを持っていたからな」

「……分かった。それで、使い方は？」

「頭にザクツと」

「まんまディアボロの大冒険だな」

そう言いつつも、DISCを受け取る。

「…頼むぞ。世界を、救ってくれ」

「後は任せます」

彼はその言い方に少しの引つ掛かりを覚える。

「おいおい、あんたらがまるでこれから死ぬみたいじゃないか」

「ああ、お前が去つたら我らは消える」

「な、何だと!？」

静かに彼等は微笑む。

「ここまで大々的な事態になってしまつて、私の失態も明らかになつたんです。

その責任を取つて、私達は消えることになりました」

「そんな…馬鹿な！」

牢獄に入れられるだけじゃあ…」

「世界を存亡の危機に晒したのだ。

それだけでは済むまい」

「だが…」

「でも、一つだけ私達が助かる方法もあります」

「それは、お前があの世界を正しく導くことだ」

「！」

「あの世界を救い、お前が正しく一生を終えることができれば、我等は蘇ることができる」

「だから、あなたはそのまま生きてくれればいいんです。

条件は変わってないんですよ」

「…分かった。あんた達を消させやしない。

俺は、生きる」

「頼むぞ…さらばだ」

「ああ」

彼は、踵を返して歩き出した。
その覚悟を新たににして。

「おい、ジヨルノ！」
「ハッ」

彼は気がついた。
目の前には悲痛な顔のナギ。

「アル達にもどうにもできないみてえだ…。
もう、駄目かも知れねえ…！」
「……………」

彼は、立ち上がった。

「ナギ、諦めるのはまだ早いですよ」
「何…だって？」

「まだ、やれることがある！」

そう言っただけ彼は頭にDISCを差し込んだ。

「儀式が既に発動してしまっただけ取り返しがつかないところまでいったら……」

『発動前』の状態まで『直す』ッ！」

その体から新たなスタンドが現れる。

「『クレイジー・ダイヤモンド』ッ！」

遅い肉体を持ち、体の各所にハートの形をした飾りをつけたスタンドが現れる。

それが儀式の魔方陣に触れた。

世界が、揺れた。

「こ、これはっ！」

「大丈夫ですよ、ナギ。」

世界は終わりません。ぼくが、終わらせません」

広がった光が収束していく。

「ド拉拉拉拉ラッ！」

さらにクレイジー・Dのラッシュが黄昏の姫巫女を閉じ込めていた水晶を破壊する。

「お待ちせしました、お姫様」

「……誰？」

「ああ、顔をあわせるのは初めてでしたね。

はじめまして、ジヨルノ・ジヨバアーナです。

あなたは？」

「……アスナ。

アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフユシア」

「そうですか。いい名前ですね。

さ、ここから逃げますよ。あなたを狙ってる人達は大勢いるんですから。

さつさと身を隠すとしましよう。丁度当てもあることですし。

ナギも、行きますよ」

「おい、置いていくなよ！」

そして、世界は救われた。

Side 【Giorno Giovanna】

最終決戦の翌日。

ぼくは今、終戦式典を終えて皆が騒いでいる宴会の席にいた。

「ゼクトは行方不明、ですか…」

「仕方ねえだろ、あの戦いじゃあ」

「まあ、そうなんですけど」

やはり気になるものは気になるのだ。

「おいおい、世界を救った張本人がそんな暗い顔してんじゃねえよ」

ラカンに言われてゼクトのことを考えるのはやめる。

確かに、今考えるべきことじゃあなかったな。

ラカンに気付かされたのは腹が立つが。

「やれやれだな」

詠春、あんたにそのセリフは似合わない。

「……………」

今度はナギが暗い顔をしている。

「…どうしました、ナギ」

「…いや、なんでもねえ」

…ぼくが聞くべきことではないようだな。
あと、聞いた話では…

「そう言えば、姫は女王になったそうですね」

「女王？何だそりゃ？」

ラカンが首を傾げる。

アルが頷いて事情を語る。

「アリカ様の父王が『コスモ・エンテレケイア完全なる世界』の傀儡であることが判明したのです。」

アリカ様は半ばクーデターのようなカタチで、その王位を奪ったようですね」

「マジで！？ どーゆーこっちゃ」

「3日前のコトです。まだ秘密ですよ」

姫…いや、もう女王様か。

彼女もこれから大変な未来が待ってそうだな。

しかし、彼女ならきつと乗り越えられるだろう。

ぼくも、自分のこれからを考えることにしよう。

そのときは、そう思った。

まさかあんなことになるとは、このときのぼくは考えもしなかった。

父王殺しと『コズモ・エンテレケイア完全なる世界』との関与の容疑でアリカ女王が投獄されたと聞いたのは、それからしばらくしてのことだった。

「何…だと…」

それを聞いたぼくは、しばらく呆然としていた。
一分ぐらいはそのままにいたと思う。

「クルト、もう一度…言ってくれますか」

「アリカ様が…投獄されました」

馬鹿な、ありえない、何故彼女が。

そんな言葉ばかりが頭の中を満たしていた。

「これは、メガロメセンブリア元老院の罠です！

彼らのせいだ…」

「わかった」

「ジョルノ！？」

いいだろう。

見事に喧嘩を売ってくれたわけだ。
買わなければ失礼というものだろう。

元老院、そっちがその気ならばこっちにも考えがある。

「生憎ぼくは敵には容赦しない性質でね。

戦争中は本当の敵じゃあないから手加減していたが、本格的に敵に回るならもうその必要はないな」

ぼくは、プツンしていた。

それはもう見事に。

「丁度『組織』も力をつけてきた頃だ。

ぼくの大切な人を貶めた罪は、きちんと償ってもらう。
首を洗って待ってるといい」

ぼくは、戦争中から育てていた『組織』を使うことを決意した。

EDテーマ 「Epitaph」 by「King Crims
on」

第四話 『鎮魂歌は誰が為に奏でられる』（後書き）

〈次回予告〉

アリカ女王は投獄された。

だが、彼は諦めない。

地に落ちた彼女の名誉を取り戻し、本当の敵を叩き潰す。

そのために、彼の『組織』が動き出す。

次回、「黄金の旋風^{かせ}」

「自分を知れ…そんなオイシイ話が…あると思うのか？お前らの様な人間に」

〈スタンド紹介〉

『ゴールド・エクスペリエンス・レクイエム』

【発現条件】

・ゴールド・エクスペリエンスに【矢】を刺す。

・刺した【矢】はゴールド・エクスペリエンスに取り込まれ、額に固定される。

・スタンドを解除すると【矢】は外れ、ゴールド・エクスペリエンスに戻る。

【パラメータ】

破壊力 - なし スピード - なし 射程距離 - なし

持続力 - なし 精密動作性 - なし 成長性 - なし

（通常のスタンドパラメータでは測りきれないため、上のようになつた）

【特徴】

- ・人型。額に【矢】の鍔^{やじり}が鎮座し、目は瞼^{まぶた}がない剥き出しの目。
- ・手の甲のてんとう虫は健在。
- ・本体から独立した意思を持つ。

【能力】

『相手の動作や意思の力をゼロに戻す能力』 + 『GEの能力（性能アップ）』

- ・このスタンドと本体に対するあらゆる攻撃や能力を無効化する。
- ・その実態は【矢】がGERを『未来の存在』にしているためのもの。

・『今』から放たれた攻撃は『未来』に位置するGERに届くことはない。

（GERがいるのは未来であるので、『今』に何をしようと既に『GERが健在である』という『未来』が変わることはない）

- ・攻撃を仕掛けたものは気づかぬうちにGERの周りにある『時間の坂』を強制的に登らされる。

（GERに近いほど『未来』に近づく）

・だが『今』の存在が『未来』に辿り着く事はできないので、自然に『時間の坂』をずり落ちてしまう。

・その際、その者は『未来』から『今』へ自分もろとも『時間が逆行している』のを目撃する。

・そしてずり落ちている際中、その者は『時間の坂の下方』、つまり『過去』には『坂をずり落ちた後』時間が逆行した後』の『未来の自分』が、『時間の坂の上方』、つまり『未来』には『坂をずり落ちる前』時間が逆行する前』の『過去の自分』が連続して見える事になる。

・さらに『時間の坂』をずり落ち弾き出された者は『時間の坂』の外で勢いあまって少しばかり『過去』にまで落ち、そして自分が『時間の坂』へと入るまでに行った言動を強制的にもう一度繰り返し返さ

せられる。

・GERが攻撃する際は『未来』から『今』に攻撃することになる。
・その攻撃が物体を撃ち出すなどの間接的なものであれば、この攻撃物体の始点は『未来』で、到達点が『今』となるため『今』の間はGERが攻撃を『放った瞬間』を知覚できない。

・直接的なものであれば、攻撃を受ける相手は攻撃の瞬間『未来』に強制的に引き上げられ、攻撃を受けて『今』に落ちる事となる。

・そして『未来』に『因果』の『原因』が存在するその直接攻撃ダメージは、『今』において決して『結果』として『完結』することは無く、いったん治っても別の理由によって再び傷つき、これを無限に繰り返す。

（永久に『くした』という『結果』に辿り着けない）

・特にその者がこの攻撃で『死んだ』場合、その者は無限に『死』を繰り返す『無間地獄』のような状態に陥る。

（例：オレのそばに近寄るなあ——ッ）

・GERはどんな攻撃も能力も受けない。そしてそれを操る本体も同様。

・さらに、GERだけはどんな状況でもその意識を保ち続ける。『時間が停止』しても、『極限に小さな時間の中』でも、『時が消し去られている中』でも、『時が加速している中』でも。

『クレイジー・ダイヤモンド』

【パラメータ】

破壊力 - A スピード - A 射程距離 - D（2 m程度）

持続力 - B 精密動作性 - B 成長性 - C

【特徴】

・近距離パワー型。

- ・人型。腹のマークや頭頂部がハートの形をしている。
- ・関節部にハート型の飾りがある。
- ・背中から首の後ろに動力パイプのようなものが接続されている。

【能力】能力射程・不明だが、百m程はあると思われる（部品が集まる範囲）

『触れたものを直す・治す能力』

- ・破壊された物質、生物の怪我等を、その程度に関係なく完全に直（治）せる。

・対象が直る（治る）際、破片や部品が自然と集まる。

（固定されていない限り。また、重いほうに軽いほうが集まる）

・直（治）す際に変形させたり、別の物質と無理矢理融合させたりもできる。

（例：人の顔を歪んだ形に治す、人を岩に融合させる）

・状態変化や化学変化を逆行させる事もできるようだ。

（例：料理を材料や原料に戻す）

・直（治）る（＝部品が集まる）スピードとパワーは凄まじい。

・その力を攻撃や移動等に応用できる。

（例：自分の血を相手に付着させ、もう一つ自分の血が付いた物を撃ち出し、相手への自動追尾弾にする）

・部品のないもの、生物の病気は直（治）せない。

・また、死体の怪我は治せても蘇生させる事はできない。

・自分や本体は全く治せない。

（ただし、体外に出て固まった血液等は「ただの物質」として直せる）

・単純なパワーは全スタンド中最強クラスで、最強と名高いスタープラチナのガードも弾ける。

・ラッシュの掛け声は「ドララララッ!」。決して「ドラドラ」ではない。

第五話 『黄金の旋風（かぜ）』

あれから二年。

とうとうアリカの処刑日が決まった。

そしてその二年の間に、アリカは『災厄の女王』と呼ばれるようになっていた。

誰も彼女の味方を名乗り出る者はいなくなっていた…

だが名乗り出る者がおらずとも、彼女の味方をするものはいた。

薄暗い部屋に男が二人いる。

一人は椅子に座り、一人は立っている。
立った方の男が尋ねる。

「…いかがいたしますか」

「…既に準備は整っています」

「…では、とうとう」

「ええ」

椅子に座っていた男が立ち上がる。

「これで奴らにトドメを刺すことができる」

「それは、何時」

「処刑日にあわせませす。…手筈は」

「大丈夫です。既に組織の者が掌握しているとの情報が」

「分かりました。…当日、ぼくは処刑場のほうに向かいます。

頼みましたよ」

「お任せください、ボス」

椅子に座っていた男が部屋を出て行くのを、立っていた男は最敬礼で見送った。

そして処刑当日。

「——魔獣うごめくケルベラス渓谷。

魔法を一切使えぬその谷底は魔法使いにとってまさに『死の谷』。

古き残虐な処刑方法ですが…この残虐さをもってようやく魔法世界全土の民も溜飲を下げることとなりましょう」

得意げに元老院議員の一人が処刑法やそれにまつわる話を語る。さぞ今の自分に酔っていることだろう。

「歩け！」

「触れるな下郎。言われずとも歩く」

アリカは溪谷に突き出した足場を一步一步歩いていく。
その足取りは少しも揺らいでいなかった。

そして、最後の一步を踏み出し。

魔獣の口内へ落ちていった。

魔獣が吼え、処刑の終わりを告げる。

議員が満足そうに口を開く。

「よろし…」

「よぉーっし、こんなモンだろ♪」

その声に割って入ったのは一人の兵士だった。

「茶番は終わり。本題に入ろうじゃねえか。

なあ、オッサン」

「無礼者！何者だ貴様、名を…」

「ちよつと黙りましょうか」

議員の口に木の枝が突っ込まれる。

そして、その背後から一人の少年が現れた。

「もががが…」

「おいおい、ジヨルノ。

もちつと手加減したらどうだ？」

「手加減する必要性を感じないので。

ラカン、あなたも何時までそんな格好をしてるんです」

「そつだな、ぬんっ！」

掛け声と同時に鎧が弾け飛ぶ。
処刑場にどよめきが生まれる。
ラカン・ジオルノに続き詠春・アル・ガトウと大戦の英雄が集結したのだ。

「もがが…ぐえっ…く、紅き翼…馬鹿なツ！
ならば谷底の女王は…！」

「当然、ナギが行ってる。

だが、この場で問題なのはそんなことではないんだ」

ジオルノが一步前に出る。

「問題なのは、あんたたちのコトなんだ」

「私達…だと？」

「そう。アリカ女王を無実の罪で投獄し、処刑しようとしたあんた達のね」

「ハッ…何を言い出すかと思えばふざけた事を…」

「これを聞いてもそんな余裕が保っていられるかな？」

ジオルノは黒い何かを取り出した。

——ブツツ、ジ、ガー…

「…だ女王は黄昏の姫巫女の居場所を吐かんのか！」

「折角父王殺しの罪をあの子に被せる事ができたというのに…」

「それよりも、捏造した証拠は大丈夫なのじゃろうな」

「うむ、問題無い。証拠はちゃんとこっちで造り上げておるわ。絶対に暴かれることのない十分な証拠をな…」

「人聞きの悪いことを言うでない。悪はあの女王。

我等はそれを証明する証拠を見つけ出したただけだ」
「そうでしたな」

『ハハハハハハ…』

ガガガガ、ジー――――

「な、それは…！」

「盗聴器の録音だ。これはある会議室に仕掛けていたやつだな。映像もある。」

あんた達全員の部屋にも仕掛けさせてもらっていた。

迂闊だったな。あんた達議員が会議でもないのに集まるなんて怪しすぎたんだ」

ジオルノがそこに盗聴器を仕掛けられたのは『組織』のおかげだ。

『組織』はジオルノが大戦中に作ったものだ。

アリカに協力を依頼したあたりから

『自分達には権力が、あるいはそれに準ずる力が必要だ』

と考え、仲間達にも秘密にして活動していた。

最初は小さな組織だった。

だが、ジオルノは戦争中ということを利用して、組織を一気に拡大させた。

テオドラと知り合いのおかげで帝国の諜報員にも知り合いができ、怪しい奴の目星も付いた。

その結果、ある元老院議員の秘書を一人、組織に引き込むことができた。

後はそいつに盗聴器を仕掛けさせるだけでいい。

そして、ジオルノはついに証拠を掴んだのだ。

ちなみに組織の名前は『黄金の旋風^{かせ}』という。

ジオルノ本人は嫌がったが、部下達の圧倒的な熱意でこの名前に決まった。

「だ、だがそれが貴様の捏造したものだという証拠はどこにも…」

「こつちには証人がいてね」

映像が映し出される。

縛り上げられ、独房のような部屋に入れられた議員の一人が映った。

「彼は自分の罪を洗いざらい自白したんだ。
その罪であそこに閉じ込められている」

ジオルノはそう言うが、実際は順序が逆だ。
先に捕らえて、拷問：ゲフンゲフン、尋問して喋らせたのだ。
だが、ジオルノにとってそれはどうでもいいこと。
証拠が掴めれば手段や方法など、どうでもいいのだ。

「他にもあと二人の証言があるけど、どうだ？」

「ぐぐ…」

「…そうだな、あんたにチャンスをやろう。

その話に関わった者の名前を全て言えば、あんたが受ける罰を軽くすると『約束』しよう」

「…本当か？」

「ああ、ぼくはこれを表沙汰にする気は無い。
あんたが喋ったなら、ぼくは黙っていよう」

そして、議員は関係した者全ての名前や所属を喋った。

「…これで、全部だ」

「グラツツエ（ありがとう）。…ところで
「む？」

「今、面白い番組が生放送されてるんだ。
一緒に見ないか？」

「は？」

「これなんだけど、ほら」

そう言つてジヨルノが出した画面は、特番のようで大きくタイトルが出ていた。

『アリカ女王は無実！？ 元老院の謀略！！』

興奮した様子のアナウンサーがマイクを握り締めて語っている。

――…トーにオドロキの事実です！

これが本当ならアリカ女王は無実ということに…！
さらにその投獄の裏にはMM元老院の存在があったことになりま
す！

この会話と映像に関して、一緒に送られてきたリストに名前が挙げ
られている議員のほとんどは今のところコメントを保留しており
…――

「こ、これはッ！ 貴様…！！」

振り向いた議員だが、ジヨルノは聞いていなかった。

「…もしもし、クロウですか？ 丁度新しい情報が入りました。

…ええ。今からリストを送りますが、その全てが関係者だそう
です。

…はい、そうです。手筈通り放送局にいる組織の者に送ってく
ださい。それでは。

………で、何ですか？」

「何ですかではない！ 貴様、さっきは表沙汰にする気はないと…
！」

スツとジヨルノの目が細められる。

「自分を知れ…そんなオイシイ話が……あると思うのか？ お前らの様な人間に」

「おのれ…！！ 貴様、この場から生きて帰れると思うなよ…！」

この場にいる兵は議員が手足のように使える戦力であるらしい。さっきの報道を見てもこちらに対する警戒を解いていない。

「…何を言ってるんだ？ その程度の戦力で」

「フフ…その程度の戦力だと？ 愚か者が

このイベントの警備はここに見えるだけではない。

周囲数十キロ二個艦隊と三千名の精鋭部隊が包囲している。

いくら貴様らとて…」

「だから、その程度の戦力でいいのかと言ってるんだ。

…さあ、皆さんの出番ですよ」

「な、何ッ…？」

「おお、待ちくたびれたぜ！

お前の話はなげーんだよ」

ラカンたちが前に出る。

「思いつきりやつちゃってください。

どうせ『議員を取り押さえる際の些細な騒動』に含まれるんですから」

「よっしゃあ、行くぜ！ ラカン・インパクト！」

盛大な悲鳴がその場から上がった。

死屍累々（死んでないが）の荒野に立っていたジヨルノに声をかけたものがいた。

「よかったですか？ あなたが助けなくて」

「…アル」

ジヨルノはナギとアリカを見ていた。

渓谷の上空でしっかり抱き合っている。

「いいんですよ」

「…あなたもアリカの事を好きだったんでしょう？」

疑問ではなく確認である問いかけ。

「…確かに。 ぼくもアリカを好きでしたよ。

でも、ナギも大切な仲間ですからね。

二人の恋路を邪魔するような真似はしなくなかったんです」

「損な役回りですねえ」

「分かってますよ、そんなことは。でも、それでいいんです」

二人はそのままナギとアリカを眺めていた。

Side 【Giorno Giovanna】

あれからぼくは世界を旅していた。

放浪ではない。

組織の仕事でだ。

ぼくにはアスナがついて来ていた。

組織の者に預けようとしたのだが、付いて来たそうだったので諦めた。

元老院は特に大きな力を持っていた者のほとんどが失脚したため大騒ぎらしい。

もちろん失脚だけじゃあ済まさないがな。

まあもうぼくにはどうでもいいが。

ところで、ガトウとタカミチに会った。

その時、タカミチがなかなか身に着けられないでいる咸卦法をアスナがあっさりやったのには驚いた。

どうやらアスナは才能の塊らしい。

タカミチが落ち込んでいたが、頑張れ。 君は努力の人だ。

そして、最近ナギとアリカが結婚した。

幸せそうな二人をぼくは心から祝福した。

で、二人は京都に新婚旅行に来たわけだ。

何故か紅き翼のメンバー全員連れて。

昼の観光が終わって、今は詠春のところで宴会をしているのだが。
目の前で繰り広げられる会話にストレスがたまるばかりだ。

「何考えてるんでしょうね、あの馬鹿は^{ナギ}」

「何か不満でもあるのか？」

「こんな甘々なストロベリー空間を作り上げて、見せ付けたいんですかね。」

「こんなことなら組織の仕事しておけば良かった」

「ハ、ハハハ……」

酒が入ってガラが悪くなってるのは分かっている。
だが、これが文句の一つも言わずにいられようか。 いや、いられない。

「ねえタカミチ、そう思いませんか？」

「え、いや、その……」

「大変です！ 封印されていた鬼神が復活して暴れているって情報が！」

なにやら厄介なことが起きているようだな。

「…わかりました。今回はぼくが出ます」

「おいおい、俺にも参加させるよ」

「ラカンですか。いいですよ」

「俺も行くぜ」

帽子をかぶる。

「ただしナギ、てめーは駄目だ」

「何でだよ！」

何ででもだ。

特に見るべきところもなく、鬼神の封印は終わった。

ボコボコにされた鬼神は少し…いや、かなり哀れだった。

封印が完全に解かれていれば別だったかもしれないが…結果論か。

そして後日。

詠春がウザい。

会話する度に妻の話が出てくるので、嫌になって最近は連絡を取っ

ていない。

「…いいの？」

「いいんだ、アスナ。」

彼にそうそう大変なことが起こると思えないし」

「…そう」

「ああ。で、今日はなんだったけ？」

「縮地」

「ああ、そうだった。」

では、まずぼくがやってみせよう」

「ボス、こんなところにいたんですか」

「クロウ、どうしました？」

「あの紛争なのですが、どうやら軍の方が強硬手段をとったようです」

「…分かりました。アスナはどうする？」

「…行く」

大体日常はこんな感じだ。

戦場に行つて戦災の被害を受けた人々を助けたりしていた。

その際、孤児なども組織が受け入れる。

それだけではなく、『裏』の組織を把握し抗争などを抑えるようなこともしている。

最近組織はレストランも出したはずだな。

そんなことをやっているから組織がよく分からない物になってしまった。

表向きは農業団体＋色々、だがその真の顔は『裏世界を統括する組織』。

…ということに世間ではなっているが、実際は違う。
本当の顔は『裏世界を統括する組織』だけじゃない。

『農業団体』もなんだ。

…最初は誰に言っても信じてもらえないが。

まあ、厳つい顔の男（組織の農業方面責任者）が畑を耕しているのを見ても、それが本業だとは思わないだろう。
本業なのに。

それからまた数年。

アスナはもうひとり立ちして、組織の幹部として働いている。
主に揉め事解決役として世界を飛び回っている。

戦闘技術は並みの相手どころか、下手するとぼくも負けるかもしれないくらいに成長した。
精神面はまだ子供だが。

だから子ども扱いされるとすぐ怒る。
無表情なので他人には分からないだろうが、僅かな表情の変化があるのだ。

そこが唯一心配な所だ。弱点にならなければいいが。
といっても、相手は子供だと油断して一瞬で沈められるので全く問題ない。

それに中途半端な力量の奴がアスナを挑発しても、怒りで出力アップし返り討ちにあっただけだし。

で、ぼくは今何をしているかというのだ。

「ゴールド・エクスペリエンス！ 生命よ、成長しろ！」

人里離れた森の中で人助けの真つ最中だ。

崖から落ちた少女を生みだした木で受け止める。

…久しぶりの休暇だったのに。

休暇は無理やり部下クロウに仕事を押し付けて手に入れた。

有能な部下を持ってぼくは幸せだ。

部下の悲鳴が聞こえてきた気がするが、幻聴だろう。
で、問題は目の前の少女だ。

「大丈夫か？ 怪我はないのか？」

とりあえず抱えあげて崖の上へ。

少女は無事のようにだ。

…日が沈むな。

「…とりあえず、夕飯にしよう」

火を熾おこし、生んだ魚を焼く。

肉はさつき獲ったから問題は無い。

野菜は、一日菜園から採ってきた。

少女が口を開いた。

「…お前は誰だ？ 何故助けた？」

「どうでもいいじゃないか、そんなこと。

人を助けるのに理由は要らないだろう？

それより、食べてみてくれ。
味は保証する」

「……………」

無言で魚を食べる少女。

「…おいしい」

「それはよかった」

アスナは焼魚が苦手だったからな。

しばらく無言で食事をし、食べ終わった頃に再び少女が口を開いた。

「…そろそろ、お前の名前を覚えてくれないか」

「だったら、そっちから教えてくれないか」

「……………」

黙り込んだ。

そんなにおかしなことは言っていないと思うんだが。

「私は…エヴァンジェリン・A・K・マグダウェルだ」

「へえ…長い名前だな。でも、いい名前だ」

「驚かないのか？」

「何に驚くというんだ？」

「……………」

睨まれた。

何か変なことを言っただろうか。

「ぼくの番だな。ぼくはジオルノ・ジョバーナ」

「お、『黄金の風』だと」

「ぼくのことを知っているのか？」

「ああ」

…ぼくのことを知っているということは、魔法使いなのか？
この少女、外見通りの存在ではなさそうだな…。

その時、誰かが近づいてくる気配がした。
どうやら男が5人のようだ。

「こんばんは、こんなところまでどうしましたか？」

「ああ、我々は警察の者だ。今、行方不明の女性を探しているんだが…。

この女性を知らないだろうか？ 急ぎ保護せねばならないのだ」

そう言って差し出されたのは、斜め上から見た金髪の女性の写真だった。

どんなタイミングで撮ったのだろうか、ギラギラした表情を浮かべている。

そういえば、いつの間にかあの少女は消えていた。どこかに隠れたらしい。

ぼくの勘でしかないが…この女性、さっきの少女に似た雰囲気を持っているように見える。

それに。

「冗談もほどほどにしてください。そんなに殺気立って何が保護ですか。

…あんたら、魔法使いでしょう？」

「君も魔法関係者か。なら話が早いな」

「何がです？」

「こいつを知らないのか！？ …まあいい。

知らないなら教えてやろう」

写真を睨み付けて一人が語る。

「こいつはエヴァンジェリン・A・K・マグダウエル。

真祖の吸血鬼にして、600万ドルの賞金首。

ダイク・エヴァンジェールマスター
異名は闇の福音、人形遣いなど…。

女子供は殺さない主義だが、今までに多くの人の命を奪っている
化け物だ」

「グラッツェ」

それでさっき彼女に睨まれたのか。

生憎ぼくはそういうことに興味は無かったので知らなかったな。

「で、こいつを見なかったか？」

「そうですね、見たといえれば見ました」

「何、どこでだ！？ 教えてくれ！」

「だが断る」

一度言ってみたかったんだ。

「こつちに杖向けないください。冗談ですよ…

…あつちの方で、似たような人を見ましたよ」

見当違いの方向を指差す。

「助かった。ありがとう」

その方向に5人は去っていった。

それからしばらくして、少女が出てきた。

「何をやっている？ ジョルノ・ジョバァーナ。

何故私のことを奴らに話さなかった。

何故私をかばったんだ」

「……………」

そうだな強いて言うなら…

「あんたがいい人だからな」

「……………」

「賞金首だけドイイ人だ。

…………… あんたはあいつらを始末しなかったから言わないことにしたんだ。

あんたはそうしようと思えばよくこと始末できた、でもやらなかった…………… ですよ？」

「……………」

「あんたはぼくの背後にいた。そのまま攻撃していればぼくはただではすまなかったろう。

あんたが自分の障害をなりそうならどんなものでも排除する人間ならばくは死んでいた…。

だからあいつらに言うのはやめにしたんです。

… 人を殺すのは確かに悪だし、許されない。

いつか殺人をしたヤツの番が来るし、もしそうなくてもそいつには同情の余地がない。

自分がそうなくてもそれは自分に抗う力がなかったただけだ、と受け入れよう。

しかし、生きるための殺しは躊躇わない。降りかかる火の粉は払う。

だが無駄な殺しはしない、それが自分の誇りだ。

……と『あんたはそう思っている』
だからあんたはぼくを殺さなかったんだ」

うつむいていた少女が顔を上げて口を開く。

「……だとしたらどうだと言っただ？」

貴様が私のことを誰かに話したり、私に手を出したりしたら貴様を始末することには変わりはないんだぞ？」

「いいやあんたはもうぼくを殺したりはしませんね。
なぜならばくはあんたの友人になるからだ」

彼女の生き方はぼくに好ましい印象を与えていた。

それから、なぜかエヴァンジェリンが僕の旅行に同行を申し出た。
その際訳のわからないことを言っていた。

「おい貴様、私のモノにならんか？」

……だったかな。

残念だが僕はモノじゃないので、と断った。
なぜかエヴァンジェリンは奇妙な表情を浮かべていたが、何だったのだろうか。

それから一週間、奇妙な旅は続いている。
エヴァンジェリンが最近僕が寝ているところに潜り込んでくるようになった。

寂しいのだろうか。いや、それはないな。

寒いのか？ … 多分そうかもしれない。彼女、マントの下は薄着だしな。

しかし、何故姿を大人版に変えるのか分からない。

… こっちの都合も少しは考えてほしいのだが。

豊満な肉体の美女が隣で寝ているのだ。しかもマントを脱いでぼくに抱きついて寝る。

いろいろなモノがストレスでマツハだ。

しかたないので、眠りに落ちるまでひたすら素数を数えている。

流石プツチ神父、効き目は抜群だ。

一ヶ月後、まだエヴァはついて来ている。

流石に長すぎないか？

名前に關しては、そう呼べと強制された。

「エヴァ、そろそろどっかいったらどうなんだ？

ぼくについて来ても仕方ないだろう」

「やだ。お前がうんと言っただとえ逃げてても地の果てまで追っ
やるぞ」

やだ、って子供じゃあるまいに…（姿は子供だが）
それに、そろそろ戻らないと組織がヤバイ気がするな。

主にクロウの苦勞的な意味で。

それにそろそろテオドラのところにも顔を出さないと。

後は各国の視察と、組織の定例会議があったな。

そして、ナギとアリカにも会いに行きたい。

尤もその暇があればだが。

「じゃあエヴァ、ぼくは仕事があるからそろそろ帰らせてもらう」

「あ、待て！ どこへ行く！」

「ああ…確か次は組織が日本へ進出する予定だったと思う。

だから日本に行くはずだ。それじゃあ、縁があつたらまた会おう」

「待て、私はお前が…！」

エヴァが何か言いかけていたが、既に転移の術を発動していたぼくは最後まで聞けなかった。

帰ってきたら、クロウが半死半生の状態だったのであわててクレイジー・Dで治した。

怒鳴り散らされたが、たまには休暇をとってもいいじゃあないかと思う。

で、仕事のために日本に行ったのだが、何故かエヴァが港で待ち構えていた。

「フッフッフ、この程度で私が諦めると思わないことだな…」

「どうやってここがわかったんだ…」

台詞自体は威厳に満ちているが、ヨロヨロしながら言っても迫力は皆無だ。

どうやら今丁度ここにたどり着いたらしい。

「フ、お前の組織の者を襲い情報を集めるのは容易くなかったが…
私はお前を手に入れるまで地の果てまで追うと言っただろう」
「だからぼくはものじゃないと言っているだろう」
「……………」

エヴァは頭を抱えた。
何がやりたいのだろうか。

「とにかく、ぼくは今あんたに構ってる暇はないんだ」
「待て」
「何だ？」
「私と勝負しろ」
「は？」
「私と勝負して、私が勝ったら私の言うことを聞いてもらうぞ」
「……………それで、ぼくに何のメリットが？」
「お前が勝ったら私を好きにしてい。い。どうだ？」

……………特にメリットはないな。

「だが断る」
「！！ 何故だ！ 私の何がいけないんだ！」
「ぼくに少女趣味はないし、あんたを好きにしたら後が怖い」
「歳か！？ 歳なら100歳越えてるぞ、私は！」
「そうじゃなくて……………」
「体なら幻術を使えば何とでもなる！」

「…なあ、あんたもしかしてぼくに惚れているのか？」
「ようやく気付いたのか!？」

…全然気づかなかったんだが。
そもそも、彼女がぼくに惚れる理由が無いような気がする。

「仕方ないな、あんたの言う勝負に乗ってやる」

「よし、じゃあ今すぐ…」

「馬鹿、こんなところで出来る訳が無いじゃあないか。
こっちで日時は指定する。」

…そうだな、今から一週間後でどうかな？」

「……構わないぞ」

よし。

そうと決まれば、ヤツに連絡を取ろう。

一週間後。

先日の港の近くにある砂浜。

「おい、貴様」

「ん？」

「ん？ じゃない。これはどついうことだ？」

「何がだ？」

「何がって…勿論、何故ここにサウザンドマスターがいるのかだ！」

ぼくが呼んだからに決まってるじゃあないか。

「おいジオルノ。あいつが闇の福音か？」

「そうですよ。あの人と戦ってほしいんです」

「は！？　おい、ジオルノ！　お前が私と戦うんじゃないのか！？」

「イヤだね、そんな面倒なこと。それにナギもやる気満々だし」

ローブの袖を肩まで捲くって腕をぐるぐるまわしているナギ。

「いやー、最近アリカの手伝いばっかですよー。

ストレス溜まってたんだよな」

「という訳で、ぼくの代わりにナギが戦うので」

「……フ、フフ、ま、まあいいだろう。」

——一瞬で終わらせてやる」

エヴァの目…完全に本気だ！

これは…負けるな。

勿論エヴァが。

結果は試合開始直後にナギの仕掛けた落とし穴にかかったエヴァの負け。

ナギがニンニクやネギを水を入れた穴にわんさか落として降参させた。鬼畜だ。

まあ、ぼくでもそうしただろうが…。

ナギはさっぱりした表情で海を眺めている。

「で、勝ったんだが…どうしようか」

「ふん、好きにするがいい…」

うつ伏せでぐったり砂浜に突っ伏したままで言われても。とりあえずエヴァは無視してナギと相談する。

「何か良い考えありませんか、ナギ」

「あ？ あー…そういえば、麻帆良のじじい知ってるか？」

「ああ、詠春の…」

「そうそうそれ。その人がよ、なんか学園の警備員欲しがってたんだよな」

「それ良いですね。でもどうしましょうか。」

エヴァがそんなこと素直に聞くようには思いませんが

「んー…。(ペラペラッ) お、この呪いなんかどうだ？」

「ああ…これはいい。ナギ、かけられますか？」

「長いが…多分大丈夫だろ。やってみつか！」

「う…？」

エヴァが嫌な気配を感じて顔を上げる。

「えーっと…マンマンテロテロ…」

「お、おい。何をする気だ!？」

「大丈夫だ。怪我とかはないから安心して欲しい。」

ただの呪いだから」

「いや、この魔力じゃただじゃすまないだろ！」

「好きにしたいと約束したのはそっちだ。守ってもらおうじゃないか」

「はーなーせー！」

暴れるエヴァを木で拘束する。

インフェルヌス・スコラスティクス
「登校地獄！」

「いやあああああああああああ！！！」

そうしてエヴァを学園に送ったばかりは、また組織の仕事に追われる日々を送った。

彼女は学生の経験はないらしいからな。いい経験になるだろう。

エヴァの呪いは数年したらナギが解きに行くだろうし。

ばく？ 嫌ですよ、そんな無駄で面倒なこと。

Side out

数年後。

とある山の中。

二人の少女が川の近くで遊んでいた。

それはそれは楽しそうに。

二人ともまだ幼い。5歳くらいだろうか。

二人は互いをかけがえのない大切な存在だと思っていた。

だから片方の少女が川に落ちた時、もう片方の少女が助けようとするの当たり前だった。

しかし、子供の力で二人分の重さを支えきれるはずも無い。

水を吸った服は重く、動きを拘束した。

川の流れは二人をもみくちゃにした。

そのまま二人は溺れかけた。

もう駄目だと二人が思ったその時、声が聞こえた。

「ゴールド・エクスペリエンス！」

次の瞬間、二人は自分たちの体が何かによって水面に押し上げられているのを感じた。

それは魚だった。一匹ではない。何十匹もいる。

あれよあれよという間に二人は川岸に押し上げられた。

「大丈夫か？」

声の方向に顔を上げると。

そこには綺麗な金色の髪をした青年が立っていた。

いつの間にか魚はいなくなっていた。

「まだ動こうとしないほうがいい。…ちょっと失礼」

そう言って彼は二人の体に手を当てた。

その際どこからか取り出したタオルを二人にかけた。

「…水を飲んだかどうか心配だったが、大丈夫みたいだな…。
二人はあの家の子なのか？」

そう言っ指差したのはここから見える大きな屋敷。

「…うん」

「そうか。だったら家の人を呼ばなくちゃあいけないな」

そう言っ彼は立ち上がりかけた。
その時、また別の人物が現れる。

「ボス、急に走り出してどうしたんですか？ …おや、この子達は？」

「クロウ、いいところに来ました。あの屋敷に行っ家の人を呼んでください。」

子供が二人溺れかけた…と言えはすぐ来てくれるでしょう」
「なるほど、それで急に走り出したんですね。しかし一言声をかけてくれてもいいでしょうに」

「無駄なことは嫌いなので。さっさと呼んでってください」
「はいはい」

男と彼が話している間、少女たちも話をしていた。
片方の少女は自分の力の無さに涙していた。

「ごめん、ごめん、守れなくてごめん、このちゃん。
ウチもつとつとつよおなる」

「えーそんなんええよ…一緒に遊んでくれるだけで」
「でも…」

「どうしたんだ？」

その会話に彼が入ってきた。
二人の前に屈みこみ、視線を合わせる。

「ぼくでよかったら話を聞こうじゃあないか。
こう見えても人生相談は結構されていてね」

彼は少女が嗚咽混じりに話をするのを無言で聞いていた。
そして、全て聞いた後に彼は口を開いた。

「自分に力がなくて友達が守れなかった…か。確かに、つらいこと
だと思う。

でも、それは君のせいじゃあない。まだ子供の君が他人を救うな
んて不可能だ」

「…でもっ」

「だが、しかし！」

「っ！」

強い口調に少女は口を閉ざす。

青年の瞳はしっかりと少女を捉えていた。

少女は、その瞳から目が離せなくなった。

「君にしか出来ないこともあるのも事実だ…」。

誰よりも彼女の近くにいた君にしか出来ないことが…ね」

「そ、それは…？」

「君にしか出来ないこと…それは、『彼女の心を守ること』」。

君なら分かるはずだ、彼女の心が…」

「！！！！」

「体を守るのは誰にでも出来ることだ…」。

しかし、心を守ることは誰にでも出来るわけではない！

本当に彼女のことを理解し、救うことが出来るのは親友である君だけだ」

「…う、うん」

「…これから、彼女の心を守るといい。月のように彼女のそばにいるんだ」

「…はい！」

そして彼は次に、隣の少女に顔を向けた。

「君も」

「ウ、ウチ？」

「そう、君もだ。彼女が迷ったら、君がしっかり導いていくんだ。太陽の輝きを持ちながらも春風のような君なら出来るとぼくは思う」

「う、うん」

その時、遠くから彼女たちを呼ぶ声がした。

「「あ！」」

「迎えが来たみたいだな…」

「ボス、呼んできましたが…」

「クロウ、お疲れ様です。さあ、帰りましょう」

「あれ、詠春さんに会わないでいいんですか？」

彼は穏やかに笑って立ち上がった。

「いいんですよ。既に目的は達成しました。『詠春自慢の娘に会う』という目的はね…」

「あの…」

「ん？」

背後から聞こえた声に振り向く。
少女二人が真剣な目で立っていた。
二人は揃って頭を下げた。

「「ありがとうございます！」」

「「...どういたしまして、お嬢さん」

「それでな、よかったら名前教えてくれへん？」

「よかったら、やけど...」

二人の精一杯のお願いに彼は微笑んで答えた。

「もちろん。ぼくはジヨルノ。ジヨルノ・ジヨバアーナだ」

「ウチはこのかつていうんよ」

「ウチはせつなっています」

「このかにせつなだな。覚えたよ。それじゃあさようなら、お嬢さん方。」

「また会えたらいいね」

「「さよなら！」」

彼は手を振ってくれる二人に手を振り返して、背を向けた。

そして、また何年かの月日が流れた。

〈EDテーマ「Gold By Prince」〉

第五話 『黄金の旋風（かぜ）』（後書き）

〈次回予告〉

ナギとアリカの子供が修行で教師をやるという。

二人に彼の面倒を頼まれたジヨルノはその学園を訪れる。

そこには彼と浅からぬ縁を持つ者達が大勢いた。

次回、『学園都市・麻帆良^{まほろ}』

「…やれやれだな」

〈スタンド能力変化〉

『ゴールド・エクスぺリエンス』

持続力 D ↓ B 精密動作性 C ↓ B

主人公たち紹介（前書き）

オリジナルキャラとか、原作と大幅に違う人とかを紹介。

主人公たち紹介

【主人公】

『略歴』

風邪をこじらせた肺炎で死んだが、いわゆる天使と言う存在によって生き返った男。

後に世界の『修正者』としての使命を負う。

『名前』

ジヨルノ時：ジヨルノ・ジヨバーナ

ウエザー時：ウエス・ブルーマリン

生前：？？？

『簡易プロフィール』

年齢：不明

血液型：A B

好きなもの：幸福な世界、気高い精神、成長

嫌いなもの：ゲス、自分のことしか考えない奴

好きな食べ物：甘いもの、エビ、ポテトサラダ

嫌いな食べ物：オクラ、漬物全般

『容姿』

どちらの姿も身長が高い。ジヨルノは170超え、ウエザーは180超え。

年齢操作により多少変わる。

ジヨルノ：金髪。額の上に、髪を巻いたのかどうだかわからないが三連ロールがある。

俗称コロネ。@@@↑こんな感じ。

胸の部分がハート型に開いた服。てんとう虫のブローチ

が胸元などについている。

ウェザー：もこもこでふわふわな帽子。二本の角が付いている。だが決して脱がない。

室内でも風呂でも寝る時でも。

あと、手首の部分にふさふさが付いた服を着ている。

『性格』

冷静沈着かつ勇敢で正義感が強い。咄嗟の機転と行動力はまさしくジヨジョ。

生前の『ジヨースター一族への憧れ』が高じて…といったところか。自分の信じる『正義』を貫き、『黄金の精神』を得ることを目標としている。

味方には優しく誠実。が、敵には容赦しない冷酷さも持つ。

自分のような人間に好意を持つはずがないという先入観のため、自分への好意には鈍感。

一度男に言い寄られたことがある。それは黒歴史、英語で言うとパンドラボックス。

ジオルノ時は年上か女性には敬語を使う。気に入らない奴にはナチユラルに毒を吐くが。

ウェザー時には誰にでもタメ口。敬語は使えなくもないがやっぱりすぐタメ口に戻る。

『能力＋持ち物』

スタンド ゴールド・エクスペリエンス

幽波紋：黄金体験（詳細は第一話の後書き参照）

スタンド ゴールド・エクスペリエンス・レクイエム

幽波紋：黄金体験鎮魂歌（詳細は第四話の後書き参照）

スタンド ウェザー・リポート

幽波紋：天気予報（詳細は第二話の後書き参照）

スタンド

全ての幽波紋データが入ったDISC

ウェザーの帽子（変装機能＋倉庫機能付き）

年齢操作『ジオルノ：10代～20代』『ウェザー：20代～30代』

パクティオーカード

『パクティオーカード』

主：——現在不明——

名前：G i o r n o G i o v a n n a

称号：s o l s o l i s d e f e n d o m u n d u s（世界を守る太陽）

色調：A u r u m（金）

徳性：s u s t i t i a e t a u d a c i a（正義と勇氣）

方位：c a r i t a s（中央）

星辰性：S o l（太陽）

数字：？（5）

アーティファクト：——現在不明——

【クロウ】

『略歴』

旧世界人。戦争で全てを失くし生きる氣力を失っていたところをジヨルノに助けられた男。

そのカリスマに惹かれ、組織に入る。組織においてはアスナと並ぶ側近。

有能だが、根を詰めすぎるところがあるので、度々病院行きになる。面倒見がいいので下から慕われているが、そのために自分に関係ない問題を抱えることもしばしば。

だからやっぱり限界超えてぶっ倒れる。ぶっ倒れる度に周りの女性陣が嬉々として介抱する。

そういう危なっかしいところがイイらしい。

一度だけだが、寝言で一日の仕事を片付けたという伝説がある。

どこまで仕事人なんだアンタ。

『プロフィール』

年齢：36歳

血液型：A

好きなもの：一人の時間、『組織』、子供の笑顔

嫌いなもの：戦い、子供の泣き顔

好きな食べ物：チャーハン、栄養ドリンク（本人は否定）

嫌いな食べ物：イカ、納豆

『フルネーム』

スケアクロウ（命名：ジヨルノ）

『容姿』

錆色の髪に薄いグレーの瞳。

少しくたびれた感じの土色のコートを着ている。

頭にはやっぱりくたびれたとんがり帽子。

顔は悪くない。が、日頃の仕事で目元に隈が出来ている。

組織の中での女性からの人気は高いが、本人に恋人を作る気は無し。

『性格＋能力』

組織第一。

紳士的で落ち着いた物腰。

だが度々ジヨルノにはキレる。

戦いは戦いを生むので戦闘が嫌い。出来る限り回避しようとする。

だがしかしだからと言って戦闘に弱いというわけではなく、むしろ強者である。

その能力を見た者のほとんどはこの世を去り、生き延びた者も口をつぐむという。

でも組織の中ではジヨルノたちに振り回される側。哀れ。

【アスナ】

『略歴』

黄昏の姫巫女。ジオルノに助けられ、後に彼の養子となる。自分の過去については既に吹っ切っている。

本人曰く、

「昔私がやらされたことは確かに許されることじゃないわ。でもそれは私の意志じゃあなかった。

私のせいじゃない事まで私が責任を負う必要なんて無いじゃない」
：だそうだ。

現在は中学生として学園生活を満喫中。

『名前』

戸籍上の名前：シオバナ 汐華 アスナ 明日菜

本名：アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア

『性格』

人にも自分にも厳しい。だがそれはジオルノを『理想』としているからである。

「原作」より遥かに落ち着いている。頭もいい。でもやっぱり口より先に手が出る。

まあ、乱暴と言うよりも口を開くのが面倒なだけなのだが。

子供はそれなりに好き。自分にまわりついてこない限りは。

雪広あやかとはやっぱりライバル。だが自分を思いきり出せることを楽しんでいる節がある。

ネギについては特に何も。『ああ、大変そうだなあ』とは思っているが。

『戦闘スタイル』

咸卦法による近接格闘。飛び道具として一応拳圧が飛ばせる。
なぜか魔法無効化能力は失われてしまっている。
だがその分打たれ強くなった。

まだ誰の従者でもないのでアーティファクトも無い。
だが未だ負け無し。（対ジョルノは除く）

第六話 『学園都市・麻帆良』

彼は電車を降り、駅に立った。

「…日本の電車はこんなにストレス溜まるものだったのか…」

ポツリと呟く。

周りのほとんどの人々は彼を見つめていた。

だが仕方ないだろう、彼の被っている帽子とその長身では。

いつまでも人目を集めておくわけにもいかず、彼は駅を出て辺りを見回した。

「ここが……麻帆良^{まほろ}か」

風が吹き、彼の周りに新しい空気が満ちた。

「……いい風が吹いているな」

人に道を聞いて目的地を目指す。
のだが、彼の容姿は目立ちすぎる。
道行く人々の視線を釘付けにしながらも何とか目的の場所に辿り着いた。

目の前のドアには『学園長室』と書かれていた。
ドアを叩く。

「ノックしてもしもお～～し」

「はいっとるよー」

「……………（…そうくるとは思わなかったな）」

扉を開ける。

そこにいたのは。

意外ッ！ それはぬらりひょん！

「……………（これが妖怪って奴か…）」

「何か失礼なこと考えとらんか？」

「いや…（どう育てば人間の後頭部があんなに伸びるんだ？）」

「オホン。話をしてもいいかの」

「ああ」

彼は勧められた椅子に座り、姿勢を正した。

学園長がその向かい側に座る。

「話は彼らから聞いているが…まさか君自身が来るとは思わなんだ。
『黄金の風』、ジオルノ・ジョバーナ」

「…その名前は今は相応しくない。今の俺はウェス・ブルーマリンだ。
ウェザーと呼んでくれ」

「それは失礼したの。それで…彼らの息子のことじゃが」

「分かってる。一週間後にこちらに来ると聞いている」

「うむ、そうなのじゃよ。君には彼が担任をする女子中等部の2・Aの副担任をしてみらおうと思うが……」

学園長はその長い顎鬚を撫でながら言う。

だが彼がそこに割り込む。

「ちよつと待て。今何て言つた!？」

「だから、女子中等部の……」

「何考えて生きてんだてめーッ！」

10歳の男子を女子中学生の中に放り込むなんてフツーやらねーだろーッ！」

「じゃがのう、20歳の男を女子中学生の中に放り込むわけじゃあるまいしそんなに言わなくとも……」

「頭イカしてんじゃあねーのか!？ 何で男子の方にしなかったんだって言つてんだよオ——ッ！」

それから数分後。

色々あったがようやく落ち着いた二人。

「ところで、彼らは君に君の組織を使って彼をサポートしてくれないかと頼んだはず。」

なぜ君が直接出てきたか、聞いてもいいかな？」

彼はゆっくり足を組み替えて言った。

「…今の組織は俺無しでも十分動ける。俺は彼らの子供を一度この目で見ておきたかった。」

それに……アスナにも会いたかったしな」

「なるほどのう」

「それで……」

「すまん」

「
なにか？」

「顔が近いんじゃないか？」

学園長と彼の顔の距離はわずか数センチ。近すぎるにもほどがある。

「癖だ、気にしないでくれ。ところでだ……」

彼がアスナについて質問しようとした時、彼の耳は異様な音を捉えた。

[illegible]

何事かと身構えた瞬間、

ドッ
グ
オ
オ
ン
！

ドアが吹き飛んできた。

「何!？」

バシィ！！

「フオ！？」

ズギヤツ！

咄嗟にスタンドで防いだドアは学園長にクリーンヒットした。
そのまま学園長はドアの下敷きになる。

……起き上がってこない。

「……………（あとで謝らないと……というか無事だといいが……）」

そんなことを彼が考えていると、その事態を引き起こした張本人が
駆け込んできた。

エヴァンジェリンだった。

ドアの下から学園長を引きずり出し、体を揺さぶる。
学園長の後頭部が激しく机にぶつかっている。

このまま昇天しそうな勢いだ。

「じじい！ 奴が来たというのは本当か！？」

「……………（気絶中）」

「おい、しっかりしろ！」

「……………おい」

そこでようやく彼女はこちらに気がついた。

「……誰だ？ 貴様は」

「……そうか、この姿では分からなくて当然か」

そういつて彼はおもむろに帽子を脱いだ。
次の瞬間、そこにはエヴァが待ち焦がれていた人がいた。

「ぼくだ、エヴァ」

「お…お前…ジヨルノ…！」

言葉にならない想いが溢れる。

涙が出そうになる。

だが、当のジヨルノは。

「ところで、なぜエヴァがここにいるんだ？」

「は？」

感動も糞もない一言を言い放った。

「おかしいじゃないか。あんたはここに15年もいるのか？」

「そ…それは……ッ！」

エヴァが震えだす。

ジヨルノは何故エヴァがそんな態度をとるのか分からない。

そんなジヨルノに向かってエヴァはぶちまけた。

拳のおまけつきで。

「お前が呪いを解きに来ないから

だろうがア——ッ！」

「危ないな」

だが片手で受け止められる。

だがエヴァは両手をぐるぐる回してジヨルノに殴りかかる。
子供か。

だがそのすべてがジオルノにダメージを与えられない。

「ん？（おかしい。エヴァの力はこんなに弱くなかったはずだが…）」

「ゼエ…ハア…貴様……一体どこで油を売っていた！？」

「油を売るも何も、呪いはナギが解きにくるはずだろう？」

「はあ？ 聞いてないぞ！？」

「………ちよつと待っててくれ」

彼は携帯（に魔法などを組み込んだもの）でナギに電話する。

これなら場所に関わらず連絡が取れる。

ちなみにこれは組織が開発した最新技術の塊だ。

噂では開発に小国の国家予算以上の額の金が使われたとか。

まあそれはおいとして。

何度かのコール音の後、間延びした声が聞こえてきた。

『もしもし亀よ亀さんよ〜っと、どちらさんですかー？』

「僕です、ジオルノですけど」

『おう、どうした？ 今頃は麻帆良じゃないのか？』

「いや、麻帆良ですけど」

横目でエヴァを見てから話を続ける。

「ナギ、ちよつと聞きたいのですが」

『何だ？』

「エヴァの呪いはあなたが解きに来るはずじゃあなかったんですか？」

『は？ 何言ってるんだ、お前が解きに行くはずだったんじゃないのかよ』

『「……………」』

フツ、とため息を吐いて彼は言った。

「こついつ時ってこついつんですよね」

『ああ』

『「……………」やれやれだな』』

「貴様らという奴はあああああああああ！」

「でどうなんだ！？ 呪いは解けるのか！？」
「……………」

彼は腕を組み、片手を頬に当てて考え込む。

「……………」呪いを解くことは、今の僕にはできない」
「ッ！！」

エヴァが下を向いて唇を噛み締める。
流石に15年も同じ生活を繰り返すのは辛いはずだ。

おまけにどんな生活を送ろうと卒業すればほとんどの人がエヴァのことを忘れる。

それはそれは辛いことだったろう。

だが、ジヨルノは更に言葉を続けた。

「だが…呪いの効果を無くすことならできる」

「ほ、本当か!？」

「ああ、条件がそろえば…だが」

「条件？」

「ああ」

彼は窓の外を見ながらゆっくり話し出した。

「まずはじめに誰にも見られない、かつ何をやっても誰にも気づかれない場所がある」

「第二に呪いの具現化。魔力による干渉を可能にすることだ」

「そして最後に…あんたが『ぼくがあんたにすること全て』に質問をしないこと。

かつ誰にも言わず黙っていると誓うことだ」

そしてそれから三十分後、エヴァの所有する『別荘』の中で。

「……まさかこんなに早く用意が済むとは思わなかったな」

「さあ、出来たぞ。呪いを解け！ 早く解け！ 今すぐ解け！」
「落ち着いてください、マスター」

興奮して喚くエヴァに声をかけた者がいた。

「……君は？」

「はじめてお目にかかります、ジオルノ様。
マスター・エヴァンジェリンの従者をさせて頂いている、絡繰茶
々丸と申します」

丁寧に頭を下げられたので彼も頭を下げる。

「これはどうもご丁寧に。だが、ぼくのことはジオルノと呼んでく
ださい。

敬語を使われるのは組織のメンバーだけで十分です」
「わかりました、ジオルノさん」

とりあえず茶々丸との話を切り上げ彼は再びエヴァに向き直った。

「さて……エヴァ、準備はいいか？ ぼくは出来てる」
「もちろんだ」

「確認しておくが……ここで見たことは誰にも言わない、知らせない

さもなければくの『組織』がどんな手を使ってでも君たちとその人の口を塞ぐだろうから……」

「魔方陣、起動」

同時にエヴァンジェリンの体から「何か」が浮き出てきた。

彼は呆れた声で呟く。

何故ならそこに現れたのは、鉛筆などのラクガキがされた大きな時計』だったからだ。

「こんなものが15年間も私を縛ってたのか……」

「と言ってもぼくに『呪いの解除』はできないから力業になるが…。魔力充填、行くぞ！ ゴールド・エキスペリエンス！」

[illegible]

凄まじい勢いでラッシュが繰り出され、時計が砕けた。だが、ラッシュが終わるとすぐに時計が直りだした。

(…これだけでも全く呪いに綻びを感じられない。やはりこれ

駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アツ！！！」

そして最も形が歪んだ所で思いつき時計を殴り飛ばした。

「……これでこの呪いが『破壊される』という行為は無限に続く。
だが『破壊された』という結果には永遠にたどり着くことは無い。
呪いの効果だけは失われる。しかし自己修復機能は働かない。
そのまま『無限に』終わりの無いのが『終わり』。それが『ゴ
ルド・E・レクイエム』」

それからしばらくエヴァの家の周りには高笑いが響いていた。
だが、あまり魔力が戻っていないことに彼女が愕然としたのは少し
後の話。

【麻帆良新名所紹介】

『魔女の森』

- ・この森は深いと言うほどではないが、下手に入れば出られなくな
るくらいの広さはある。
- ・この森の奥には小屋がぼつんと立っている。まるで物語の中の魔
女の小屋のように。
- ・時々そこから不気味な高笑いが聞こえてくることもあると言う。
- ・だがその高笑いは老婆などではなく少女の声らしい。
- ・迷っても運が良く小屋にたどり着ければ、少女のロボットが帰り
道を教えてくれる。

それから色々あって。

『新任教師』としての彼の紹介。

それは何事も無く終わった。

だが『魔法教師』としての彼の紹介で一悶着あった。

彼が黄金の風だということは学園長とエヴァしか知らないの、彼の素性に対する質問等があった。

実力はどうか、『組織』は信用できるのか、過去の経歴は、など。だが彼は元々用意してあった回答を答えた。

勿論、経歴は組織によって捏造されたものだ。

そして、力量を試すとの名目で彼はタカミチと戦うことになった。

タカミチもあまり乗り気ではなかったが仕方なかった。

【結果】

タカミチの無音拳はウェザー・Rの『気圧の壁』の前に通じず。

咸卦法を使った豪殺居合い拳は壁を突破するが、風圧パンチで相殺される。

その後、集中豪雨で地面に叩きつけられ再起不能^{リタイヤ}ではなく再起可能。

お互い様子見だったのが分かってしまったため、手合わせ後にちょっと微妙な空気に。

そして戦いの最中にタカミチはウェザーⅡジヨルノということに気づいた。

と言つより思い出した。

そして次の日。

彼は2 - Aの教室の前にいた。

一人で。

「……………（いくらなんでも初日の副担任に全てを任せるか？　タカミチエ…）」

そう心の中で愚痴りながらも彼はドアを開けた。
次の瞬間頭上から降つて降つてきた黒板消しは一步下がって蹴り飛ばす。

勿論ズボンに粉がつかないようにして。

蹴り飛ばされたそれは（ウエザー・Rの風もあつて）教室の天井近くに設置されたバケツを打ち落とした。

足元に仕掛けてあつた縄は普通に越える。

後ろから飛んできた矢は僅かに起こした風で回避。

流れるような動作で彼は教卓についた。

「…今日からこのクラスの副担任になったウエス・ブルーマリン（Wes Blue marine）だ。」

気軽にウエザーと呼んでくれ。担当教科は…英語と歴史だ。いつまでここににいるかわからないが、よろしく頼む」

そんな彼の挨拶に対する返答は。

「——キャアアツ、かつこいいーっ!」

ほぼ全員の大歓声だった。

続いて怒涛の質問攻めが彼を襲う。

「何歳ですか!？」

「どこから来たんですか!？」

「何人!？」

「日本語うまいですね!」

「今どこに住んでいますか!？」

だがそんな女子生徒たちを彼は。

「五月蠅い黙れ、蹴り殺すぞ」

立った一言で黙らせた。

それに籠められた殺氣に中てられて生徒たちは声を飲み込んだ。

「……それでいい。質問は一つずつだ」

その時、彼の胸に飛び込んできた者がいた。

彼女は彼の胸に頭を埋めた後、ゆっくりと顔を上げる。
全員が凍り付いている中、彼女は特大の爆弾を投下した。

「久しぶりね、『父さん』」

「ああ、久しぶりだな」

彼女の名前は『シオバナ汐華 アスナ明日菜』と言った。

名前から分かるようにアスナはジョルノの養子になった。
いつまでも素性不明では彼女が『黄昏の姫巫女』だとバレル恐れが
あったからだ。

元々彼に懐いていた彼女はすんなり彼の家族になった。

そして、ある日彼は彼女に提案した。

『学校に行きたくないか？』

彼女はそれに頷き、麻帆良に入学した。

そしてそのときに使った名前が『シオバナ汐華 アスナ明日菜』だったのである。

『な、なんだってエ——ッ！』

確実にその瞬間、校舎が揺れた。

「ど、どういうことなの！？ これは一体ッ！？」

「そんなはずは無いわ！ そうか、これは夢なのね！」

「理解不能！ 理解不能！」

「OH MY GOD！」

「うるたえるんじゃないありません！ 麻帆良学園生はうるたえないッ！」

大騒ぎする周りを傍目に、二人は会話を交わしている。
お互いその顔には微笑を浮かべていた。

「ちよつと待った二人ともーっ！」

「何？」

完璧に揃って怪訝な顔で振り向く。

「聞きたいことがあるんだけど！ 山ほど！」

「質問か…いいぞ。そうだな…その…朝倉だったか、お前が仕切れ」

「は？ 私？」

「報道部だろ、インタビューはお手の物じゃあないのか」

「そ、そうだね。じゃあまず、二人の関係をも一度どうぞ」

「親子だ。……義理のだから」

「じゃあ、先生は何歳なんですか？」

彼は事も無げに答えた。

「俺か？ 俺は39歳だ」

『嘘だッ！！』

また校舎が揺れた。

「嘘だと言われても……事実だからな」

「なぜこんなにも若く見えるのか……」

「まさに生命の神秘だね」

「……話が進まなそうから次だ」

「明日菜さんとは何故親子に？」

「ややこしい事情があるから黙秘させてもらっ」

「……趣味は？」

「野菜を育てることと空を眺めることだ」

「特技とがあります？」

「……ああ、湿度を完璧に当てられるぞ。（スタンド使ってたがな）
他には……そうだな、常に爪先歩きでいられる。」

あと『スゴ味』でほとんどの場を切り抜けられる」

「び、びみよくな特技…」

「彼女とかいます!？」

「黙秘だ」

「ん…じゃあズバリ、このクラスで目に留まった人は!？」

「アスナとさよ、だな。他にも何人かいるが、それについては黙秘させてもらう」

「ほうほう…(さよって誰?)……………ところで」

「なんだ」

「顔近いですけど…あと鼻息がなまあたかいです」

「癖だ、出来るだけ気にしないでくれ。オイ、これで質問は終了だ。授業に入るぞ」

『はい!』

【ウェザーの授業】

く歴史の授業にてく

「————そして、ここでこの反乱が起きる。理由はわかるか、ア

スナ？」

「幕府の権威の失墜が明らかになったからでしょ」

「そうだ。いいか、歴史の流れには必ず人の感情が絡む。政治は人がするんだからな。」

だからまずは事件の名前の丸暗記より関係の変化などを追って行く
と理解しやすいぞ」

『へー』

「へーと思ったらノートを取るんだな」

ざっ！ がさがさ、カリカリカリ…

「その事件に関して自分なりのストーリーを作ってみるのもいいかもしれない。」

そうだ、次の時間に小テストやるぞ。きちんと流れを把握しておけば大丈夫なレベルだからな」

このような感じで進むウェザーの授業は割りと好評だった。
ただし、授業で当てる度にウェザーが顔を近づけてくることには賛否両論あったが。

【幽霊少女とウェザー】

「授業の後の屋上で」

「——何の用だ？」

「やっぱり、私のこと見てるんですか!？」

幽霊少女、相坂さよは彼に詰め寄る。

「ああ、最初は雲か何かかと思ったが…近くで見れば流石にな」

「く、雲…。…でもすごいです！　今までどんな霊能力者にも気づいてもらえなかったのに！」

幽霊として生まれて（？）からこの方、彼女は誰にも存在を認知されなかったのだ。

彼女の存在感が薄すぎるというのもあるが、照れ屋なところもあったからだろう。

「そいつが大嘔吐きだったかマヌケだったんだろ」

彼は容赦無い。

彼によると、さよがいるところの空気が何か変だと気づかない時点でおかしいらしい。

と言っても、これは彼のスタンド能力＋死線を潜り抜けた経験によるものかもしれないが。

突然、もじもじしていたさよが話を切り出した。

「ところであの…私と友達になってくれませんか？」

「友達？…別に構わないが」

彼は別に気にした風も無く答える。

するとさよは突然泣き出した。

彼はぎよつとした。

「おい！？」

「よかった…私、ずっと一人で寂しかったんです…」

「泣くな…こっちが悪人みたいに見える」
「は、はい…」

彼は彼女の頬を撫で、涙を宙に散らす。

「とにかく、これからよろしくな」
「はい！」

雲のような男と幽霊少女はこうして出会った。

「ああ、言っておくがお前にもテスト受けてもらっからな。口述で」
「ええ!？」

【小テスト】

授業中の教室、クラス委員長である『雪広あやか』は意を決して立ち上がった。

「先生、よろしいでしょうか」

「なんだ、雪広」

よく見るとあやかは震えていた。

（ある特定の話題ではまったく落ち着きが無いが）いつも落ち着いている彼女にしては珍しい。

「全員を代表して言いますけれど…これはどういうことですか？」

「小テストだが」

「それはわかっています。ですから…」

…なんで問題文が英語なんですかと言っているんですッ！」

とうとう彼女は声を荒げた。

だがお前それでいいのか？ お嬢様らしくねーぞ。

…だがそれも柳に風、馬耳東風、ウェザーに居合い拳。

「英語の小テストも兼ねてるからだ。それに英語の辞書持参って連絡しただろ」

「そついう問題じゃないでしょう!？」

「いいから早く解け。問題のレベルはそう大したものじゃあないんだからな」

あやかの悲痛な叫びにも彼は聞く耳持たなかった。

（——無茶苦茶だ!）

全員の思いがひとつになった瞬間だった。

【住む場所】

「昼休みの職員室で」

「そういえばウェザー」

「なんだタカミチ」

缶コーヒー片手に話しかけてきたタカミチに彼はパソコンと格闘しながら返事をした。

「あなたはどこに住んでいるんですか？ 学園長に住居を提供してもらったりはしてないでしょう？」

「敬語はやめろ。——実は既に家を買っている。そこに住んでいる」

不機嫌そうな声に咄嗟にタカミチは首をすくめた。

「すみません。…へえ、どんな家なんだい？」

「一戸建てでな。広い庭があるんだ。今はそこを畑にして野菜を育てている」

「はは、あなたは昔からそればかりだからなあ」

あの大戦中もそうだった、と心の中で付け加える。

ウェザーは画面を睨み付けながらも答えた。

「野菜を育てることはな、自然と向き合う一番身近なことなんだよ。」

そして自然を通して自分を見つめなおすことが出来る」

「はあ……」

そんな理由があったのか、とタカミチは彼に対する認識を改めた。一段落したのか彼は画面から目を離してタカミチのほうを向いた。そして困ったように告げる。

「ただな、最近エヴァがよく訪問してきては飯をたかるんだ」

「は、はあ」

「ただで飯を食っていくもんだから、困ってたんだよ。」

まあ、茶々丸と一緒に料理することでレパートリーが増えたのはよかったが」

「はは……エヴァは好きな人と一緒にいたいだけだろう」

タカミチのその言葉に彼は首をひねる。

「好きな人ね……もう忘れていると思ったんだが」

「忘れる？」

「俺みたいな奴よりいい男はたくさんいるだろう」

「…………（いや、そこはもっと自分を客観的に見るべきだろう。あともっと女心を知るべきだ）」

『自分には大した魅力は無い。』

自分はどこにでもいるただの人だし、女性が惚れるような点も無い」

と彼は固く信じている。

彼を知る人間が聞いたら全力で否定するか大笑いするか。

まあそんなこんなで彼に惚れた女性は割を食う。

がんばれエヴァ、いつか彼に思いは届くさ。

……多分。

「だから特に不自由はしていないから気にするな」
「そうか、よかった（エヴァはよくないかもしれないが）」

その頃、何故が出てきた涙に困惑する吸血鬼がいたとか。

【二人】

「……………」
「……………」

昼休みの中庭。

ウエザーはある生徒と一緒にいた。

二人はお互いの顔を熱い視線で見つめあっている。
そこに生徒が通りかかる。

『釘宮 円』と『椎名 桜子』だった。

「あ、ウエザー先生こんにちは」

「ああ」

「ザジちゃん？こんにちは」

「……………（コク）」

返事をして彼と『ザジ・レイニーデイ』はまた見つめあつ。
傍から見ると彼がザジにガンつけてるようにも見えるが。

「先生、何やってるんですか？」

「話をしている」

「え？ ザジちゃんど？」

「ああ」

無言で？、と言う質問に彼は頷いた。

「ちなみにどんな？」

「さつきは日本の政治についてだった」

「え」

「今は雑談だ。授業についてだったりな」

「…………（コクリ）」

不思議な人、いや変な人だ、と二人は思った。
もしかするとザジ以上に。

「ところで二人は小テスト大丈夫だったのか？」

「あ」

「う…あ、それじゃもう私たち行かなきゃ！」

「さよなら！」

「…………（ひらひら）」

「…………逃げたな」

彼は溜息をついた。

だがまあ彼女らの気持ちもわからなくもないので見逃す。

彼はザジと無言で意思疎通が出来るようになっていた。

始めは彼も言葉を発していたのだが、いつの間にか必要無くなった。
ちなみに二人が初めてここで出会ったときの会話がこれだ。

今彼女はそれを返しに行っていた。

「くくく」

読んだ本が面白かったのか、随分とご機嫌である。

そんな彼女は受付で本を返すと、また新たな本を探しに書架へ向かった。

そこで彼女は異変に気づく。

誰かいるのだ。

いや、誰かいるだけならまだいい。

おかしいことじゃあない。

『本の山に囲まれている』誰かがいるというのがおかしかったのだ。彼女の目の前には本の山。

その中から静かにページをめくる音が響いてくる。

いつもの彼女なら声をかけなかっただろう。

だが、その日の彼女は機嫌がよかった。

少しだけ『ハイ』になってしまっていたのだ。

「あの、もしもし…？」

「ん…？」

気怠げな男性の声が本の向こうから聞こえてくる。

「えうつ…（男の人だったんだ…）」

「何か用ですか？」

「あ、えつと近くを通りかかったらあなたが本に囲まれていたの、出られるのかなーって…」

「大丈夫だ、問題ない。きちんと片付けますから」

「あ、そうですか…」

そこで声は不思議そうに尋ねた。

「ところで、あなたは誰です…?」

「えっと、図書委員の宮崎のどかっていいいます…」

「ふーん…のどか、か。声しか聞いていないが、君にあった名前ですな」

突然のその台詞にのどかは一瞬言葉を詰まらせた。

「え、あ、ありがとうございます。……あなたの名前は?」

「ぼくですか。ぼくはジオルノ・ジヨバーナ。ヨロシク」

「あ、その、よ、よろしく願いします…?」

よろしくでいいのか?、と首をひねるのどか。

ともかく、そのときはそれで会話は終わった。

その後のどかはその場所に行ってみたが、誰もおらず本の山も幻のように消え失せていた。

それから数日後の放課後。

図書館が閉まる時間になった。

ふとあの本の山を思い出したのどかは自分が借りようと思った本を抱えたままあの場所へ行ってみた。

するとそこには、椅子に腰掛けて本を読んでいる一人の青年がいた。図書館の中で不思議なことだが、風が吹いているかのように彼の黄金の髪は揺れていた。

「あ…」

彼女はその一枚の絵のような光景に見惚れた。

「ん…？」

彼が振り返り、彼女を視界に捕らえる。
形のよい唇の端が少しだけ上がった。

「君が、宮崎のどか？」

「そういうあなたはジョルノ・ジョバァーナ？」

不思議と落ち着いた気分だった。
いつもの自分なら男性を目の前にとすると、真っ赤になって何も話せなくなるのに。

「あの、もう閉館時間ですよ」

「そうか、もうそんな時間ですか。…ありがとう」

「どういたしまして」

彼の微笑みに自然とこちらも微笑んだ。

「君が持っているその本は、借りるんですか？」

「はい、まあ」

「じゃあ急いだほうがいいですね。早く行かないと借りられなくなりますよ」

「あ、そうですね」

そう言っただけを返そうとしたその時だった。

彼女の足がもつれた。

あっと思ったときには既に世界が傾いていた。
倒れることを覚悟して彼女はぎゅっと目を閉じた。

だがいつまで経っても予想していた衝撃は来ない。
何かに体が支えられている。
恐る恐る目を開いた。

「大丈夫ですか？」

彼の顔がすぐ近くにあった。
どうやら彼が支えてくれたらしい。

「急ぐのはいいが狭い図書館では慌てないほうがいいですよ。怪我をしたら大変です。」

特に君みたいな少女に傷は似合わない」

やはりその髪は揺れていた。

その顔を見ていると、急に顔が熱くなった。
慌てて立ち上がろうとする。

「あ、その、ありがとうございます。わたし大丈夫ですから……きや！」

途端にバランスを崩し、また倒れそうになる。
だが彼が腕をつかんで引き寄せたので倒れずに済んだ。

「だから言ったでしょう。慌てないほうがいい」

「ご、ごめんなさい」

真っ赤になったまま、首をすくめる。
変だ。

さっきまではなんとも無かったはずなのに、今はこんなにも顔が熱い。

「…落ち着いたみたいですね。さあ、本を持っていきましょう」

そう言つて彼は床に散らばつた本を拾い出した。

慌てて彼女はその作業に参加した。

胸の高鳴りの正体を確かめながら。

「あの、ありがとうございます」

「別に構いません。ぼくがやりたくてやったことですから」

図書館の外。

夕焼けが建物を赤く染めるその中に二人はいた。

少女は顔を赤くしながらも、笑顔で話す。

彼も薄く微笑んで話に応じていた。

「それより、それだけの本を抱えていて帰れますか？」

「あ、大丈夫です。これでもいつもよりかなり少なめですから」

「ならいいんですが…。さて、そろそろ帰ります」

「あの！」

「ん？」

一度背を向けた彼を彼女は呼び止めた。

振り返る彼の姿に彼女の鼓動が早くなる。

「明日も、ここに来ますか？」

「そうですね、多分来ると思います」

「……………待ってます」

「何だつて？」

聞き取れなかった言葉に彼は問い返したが、既に彼女は背を向けて走り去っていた。

この日、宮崎のどかは恋をした。

Side 【Wes Bluemarine】

ネギが来るまでの一週間、俺の忙しさはまさに目が回るほどだった。ろくにクラスの奴らと知り合う暇が無いほどにな。

と言っても並行して処理していた組織の仕事の忙しさに比べればまだマシな方だが。

あれは量だけ多くて中身は大したことじゃあないことがほとんどだから困る。

そして一週間後、ネギが来た。

ここは学園長室。

「あなたが僕をサポートしてくれるウェス先生ですね、よろしくお願いします！」

目の前で頭を下げているスーツに身を包んだ赤毛の少年がネギらし

い。

幼い頃のナギにそっくりだな。

セト神事件を思い出す。

おっと今はネギの話だった。

こうしてみると確かに顔はナギ似だが、性格はアリカ似っぽいな。融通が利かなそうなところとか、ドジそうなところとか。

「UES・ブルーマリンだ。ウェザーと呼んでくれて構わない」

「あ、はい！」

「ところで、今日来たばかりなんだな？ …住む場所はどうするんだ？」

「それが、まだ決まっていなくて…」

魔法学校まほうがっこうがやってくれるんじゃないのか。

「だったらわしが」

「なら丁度いいところに来たな。実は俺の家の部屋が空いている。

そこに来たらどうだ？ 家賃は要らない。ただ毎月食事の材料代は出してもらうが…」

いろいろ手続きもあるが、俺がやってもいい」

「いいんですか？」

「もちろん。だから今こうやって提案している」

「……ありがとうございます。お言葉に甘えさせていただきますね」

丁寧ていねいに頭を下げるネギ。

とてもナギの息子とは思えないな。

「さて、教室へ行くぞ。心の準備をしとくんだな」

「うっ、キンチョーしてきました…」

学園長室のドアを開け、外に出た。

「……あれ、わし無視？」

後ろから何か聞こえている気がするが、気のせいだろう。

たとえ後ろからしくしくと言う声が聞こえても気のせいだ。

そう、別にこの間体よく押し付けられた夜間警備員の仕事にキレているわけじゃあないんだ。

だから俺が投げた鉄球が後ろで誰かの頭に当たる鈍い音も聞こえないんだ。

教室の前。

「これがお前がこれから担任をするクラスだ」

「うわー、こんなに？ 大丈夫かなあ……」

窓から教室を覗き込んでネギは溜息をつく。
だが今からそんなんじゃないぞ。

「心配するのはもっと後におくんだな。さ、入るぞ」
「あ、はい！」

ドアを開ける。

両側から倒れてきたモップを両手で受け止める。

次の瞬間飛んできたボールを軽く頭を下げてかわす。すると頭上から水が入ったバケツが迫ってくる。

一歩右にずれる。

落ちた。

だがまっすぐ落ちたのでほとんど水はこぼれなかった。

その僅かにこぼれた分も『ザ・ハンド』が削り取って消す。

生徒たちからはバケツからは何もこぼれなかったように見えるはずだ。

教卓について一言。

「お前ら片付けしておけよ。してなかったら全員廊下立たせるからな」

『ええー！』

「だったらやるな。…さて、今日からこのクラスの担任が変わる。知ってるな？」

そのガキがそいつだ。早速だが自己紹介してもらおう。――

――ネギ」

「は、はい」

ネギがカチカチに緊張しつつ教卓についた。

「ええと…あの…ボク…ボク…」

一度息を吸って再び口を開く。

「今日からこの学校でまほ…英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです。」

3学期の間だけですけどよろしくお願いします」

『……………』

一瞬の静寂の後、

『キヤアアツ、かわいいい——！』

歓声が爆発した。

というかこの光景前も見ただぞ。

その後、ネギは生徒たちにもみくちやにされていた助けはしない。

それじゃあネギのためにならないからな。

だが、あれじゃあいつまで経っても軽くあしらえるようになるのは無理だな。

今度一度だけ手本を見せてやるか。

そして、その後のネギの授業だが、まあ割りとまともにやれていたと思う。

やはりネイティブが英語を教えるのが一番だからな。

と言っても中学で教えるのはアメリカンイングリッシュだが。

ネギが話すのはブリティッシュイングリッシュだ。

まあウエルズ訛りが無いのはいいことだが。

さて、放課後には俺とネギの歓迎会があるらしい。準備が出来るまでどうやって暇を潰そうか。

夕方。

帰宅部の生徒たちの一部が家路に着き始める頃。
2-Aの教室では。

『ようこそ、ネギ&ウエザー先生ーッ!』

俺とネギの歓迎会が行われていた。
と言うか料理はどこから調達した?
安全面は大丈夫なんだろうな?

「やれやれだな」
「随分疲れてるみたいだね、ウエザー」

タカミチが近くに寄ってきた。

「知ってるだろう。俺はこういうパーティーが苦手なんだ」
「そういえばそうだったね。君はありとあらゆる手を使って式典な
どから逃げ回ったんだっただ」
「特にアリカとテオドラからは呼ばれまくったからな」

あの頃は『組織』の仕事だとか各地の紛争の收拾だとかの理由をつ
けて逃げ回ったが…。

「まあ、挨拶をしなくていい分気が楽だ」

「ハハハ、君の挨拶はなかなか好評だったんだがね。特にあの『皆、家族はいるか』の……」

「やめてくれマジで」

あれは俺の中では封印級の過去だ。

それっぽい挨拶をしようと思ったただだったのだが、気づくとかなり語ってしまった。

しかもそれが大ウケ。涙を流す者までいた。すぐく気まずかった。

慌てて『組織』に式典の動画流出を防がせたのは何とか間に合った。でなければ俺は恥ずかしさで全身からクロス・ファイア・ハリケーンだったろう。

その時、向こう側から会話が聞こえてきた。

「ねえ、明日菜。ウエザー先生ってどんな人？」

「ん……そうね、とっても厳しい人よ。自分にも、他人にも。

父さんは何よりもまず『覚悟』を大事にしているの」

「覚悟？」

「ええ、自分の行動の責任から逃げないこと、自らの進む道を切り開いていくこと。

『覚悟があれば後悔は無い。つまり人生に悔いが無いからある意味で幸福かもな』

って本人は言ってたけど」

「へえ」

「それに自分が信じる『正義』も大事にしているわ」

「正義？ 大の大人が？」

「ええ、正義。これだけは譲れないっていう自分の中の絶対の掟。でも父さんはそれを誰かに押し付けたりはしないわ。人の数だけ

正義があるって言ってるね」

流石に恥ずかしくなってきたので会話に割り込む。

「おいアスナ。流石にそれ以上はやめてくれ。

まるで俺が誇り高い立派な人間みたいに聞こえるじゃあないか」
「わたしはそのつもりで言ったんだけど？」

おいおい…。

一方、向こう側では雪広がネギに銅像を送っていた。

貰っても置き場が無いだろうに。

と言うか一日で作っただろうか。

だとすれば流石雪広家の財力は格が違った！ってところか？

さて、歓迎会もそろそろたけなわか。

何か俺もやったほうがいいか？

「そうだな……タカミチ、付き合え」

「は？ 何にだい？」

「一曲やる」

タカミチはドラムが叩けたはずだから…よし。

「エヴァ」

「なんだ？」

「お前何か楽器弾けないか？」

エヴァは首を横に振る。

だがそこで茶々丸が口を開いた。

「私はある程度の楽器を弾くことが出来ますが」

「ふん？ 楽譜さえあれば大丈夫か？」

「はい」

「じゃあキーボードを頼む」

…だとすればもう問題は無いな。

「アスナ」

「何？」

「一曲いくぞ。お前がヴォーカルだ」

アスナは流石に一発で分かってくれた。

「と言うことは…『アレ』？」

「ああ。…よし、楽器を持ってくるか」

楽器を準備し、ベースを持って教室全体に声を投げかける。

「皆、こっちを向いてくれ。——ここで一曲お礼に皆にプレゼントしたいと思う」

「曲は何ですかー？」

柿崎から質問が飛んできた。

「今日はこんな席だ。ノリのいいやつでいく。」

曲は…『Spice Girls』で『Wannabe』

「EDテーマ『Wannabe』 by『Spice Girl
s』」

結果は大成功だった。

あれから俺も少し歌うことになったが、だいぶ好評で安心した。
中学生相手に洋楽を弾いてもノリで何とかなるものだな。

【おまけ】

「その頃の組織」

「クロウさん、書類の決裁お願いします」

「クロウ様、ホテル業方面から給料を上げてくれとの要求が来てお
ります」

「クロウ、昨日案件許可…?」

「おいクロウ、もうすぐ会議の時間だぜ」

「ボスウウウウウウウ！ オンドウルラギッタンディスカー
！」

第六話 『学園都市・麻帆良』（後書き）

原作開始ッ！

…でもこれもはや別物じゃね？

ああ、あとネギ君は康一君ポジションです。
かなり成長するからよ、まあ見てなwww

…次回予告…

彼のサポートの元、ネギは先生として平穩無事に過ごしていた。
このままの日々が続けばいいなとネギは思っていた。

だが、そんなネギに学園長から課題が与えられる。

その課題は『2・Aを学年最下位から脱出させる』と言つものだった…。

第七話「学園長からの指令：『学年最下位を脱出せよ！』」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2487r/>

野菜と黄金体験と天気予報

2011年10月8日13時45分発行